

第11回バトトル仮面舞踏会縦書き版作品

| | | | | | |
|----|----------------------|----|----|----------------------------|----|
| 23 | 「糸赤橋」背筋シャキ太郎 | 38 | 24 | 「約束」昨日の友は今日の敵。 | 38 |
| 22 | 「橋の上」大橋千住 | 36 | 25 | 「英雄の話」アルファルファ作戦 | 41 |
| 21 | 「クリスマスプレゼント」全試合全力投球 | 34 | 26 | 「15歳からの恋文」猫まんま | 42 |
| 20 | 「願掛け橋」美咲トウィンクル☆ | 32 | 27 | 「首都高湾岸線」古賀卷子 | 44 |
| 19 | 「しようろうばし」aledo | 31 | 28 | 「You who sinks in red」霧ヶ峰雲 | 46 |
| 18 | 「橋の上停留所」鍵屋染吉 | 29 | 29 | 「石橋で戦って渡れ!!」木古里博士 | 47 |
| 17 | 「ウメちゃんのいた日々」樋口紅葉 | 28 | 30 | 「王の子、橋番の子」コロツケごえんのすけ | 49 |
| 16 | 「寝食の浸食」意識の滲青 | 27 | 31 | 「はねのはえたさかな」眠れる獅子座流星群 | 50 |
| 15 | 「橋の下」多田ちよこ | 23 | 32 | 「麒麟」師走寝太郎 | 52 |
| 14 | 「Mr. ソールマン」男魂 | 22 | 33 | 「悠久の橋」 | 54 |
| 13 | 「くじら尺禁止法」Tバックハイスクロール | 21 | | | |
| 12 | 「明日に架ける橋の上」おんこちしん | 19 | | | |
| 11 | 「待恋橋」綾之丞 | 17 | | | |
| 10 | 「橋の向こう」オリオン | 17 | | | |
| 09 | 「御所の橋の上で」常盤御前 | 15 | | | |
| 08 | 「Gold Dusk」シルバー | 14 | | | |
| 07 | 「地図にない街」ビートいさお | 12 | | | |
| 06 | 「ハルトマンの妖怪少女」三割ボブ | 11 | | | |
| 05 | 「翼無き偶像」ガルグイユ | 8 | | | |
| 04 | 「橋上夢路」ついでむなはと | 7 | | | |
| 03 | 「サイドブリッジ」エウロパ☆ | 5 | | | |
| 02 | 「背中」グラタンの焦げ目 | 4 | | | |
| 01 | 「こがねむし」窒息きんぎょ | 3 | | | |

■参加者（五十音順）敬称略

あほわに、A l e x、一兔、うなぎ、越冬こあら、ガビガビ、ガミ、霧島弾、銀、k u n太、蔵螢、ごんばち、サンソン、紫月結心、シャケ弁、J A C K、裾野、ステイル、太郎丸、ちよか、D・J・コビー、鳥野 新、七人、につきよ（曳舟・塩瓶）、ハオ、ひねもすのたり、百、吹雪直雲、M A O、みづの、やえこ、やしろ、ゆきのしん

全33作品

A4版用紙54枚相当

※ 各作品の著作権は、それぞれの作品の作者に帰属します。無断転載および転用をかたく禁じます。

01 「こがねむし」

窒息きんぎよ

絶望の梯子を登って雲を突き抜けた。

そうと確信した。見開いた目に飛び込んできたのは煤けたコンクリートのまだらな灰色でも、手垢に黒ずんだ段ボールの隙間から垣間見えるホウキギクの群れと、その向こうで鈍く陽を弾く淀んだ川でもなく、見る者を不安にさせるほど透明な、底のない青空だったからだ。大の字で寝そべって、気違いじみた陽射しに灼かれていると気づくまでは。

生焼けの私の傍らを硬い靴音が絶え間なく通りすぎる。それに混じって近づく歌。

無機質で疲れた顔の集団を私は無害と認識し、彼らは私を路傍のゴミと認識している。私は彼らを見るときもなしに眺めるが、彼らは私から目を逸らす。ときに私の発する臭気に足早になる者もある。

ああ。苛々する歌だ。

橋上の喧嘩にも負けない元気一杯な声。子供達は整然と二列縦隊に並び、無害な集団に混じって「黄金虫」を歌いながらややつて来る。みな一様によく日焼けして、手には虫取り網、肩からたすき掛けに虫かごを提げていた。夏休みだから昆虫採集に行くようだ。

よりによってあんな辛気臭い歌を。

「儂を讚える歌に文句をつけるのか」

私の思惑を見透かすように勝ち誇った声が言った。胸元に一匹のコガネムシがとまっている。

「あれは勝ち組の歌だ。だからお前には耳障りなのだよ」

虫けら如きと言い争うほど落ちぶれたくはないが、虫けら如きに莫逆にされつ放しなのも我慢ならない。私は無言でコガネムシを押し潰してやった。虫にあるまじき貫禄ある声が、寸前ささくれた悲鳴を上げた。しかし予想以上に大きなバリツという乾いた音と、そのあとも何本かの脚が蠢いている感触のほうがよく不快だ。虫酸が走る。当にその心地。

歌声は既に遠い。そも私の左腕は、長い髪を広げて横たわる女の枕にされている。女は全裸で、しかも顔がない。

行き過ぎる無害な集団は色彩を失い、もう個を判別できなくなっていた。それらは、あられもない姿で路上に打ち棄てられている女を哀れみさえしない、残酷な肉の川へと変じていた。そして嘗てそちら側にいた私もまた平然と、無造作に、腕を引き抜いて立ち上がった。

女の口の辺りまでもぞと動く。その意思を斟酌してやろうとするなげなしの親切心は、何か別の生き物が薄皮一枚下で這い回っているような薄気味悪さにかき消えた。踏みつけてやりたい衝動を堪えたことこそ、私はまだ善良なる証。

そうは思わないかね。

肉の川を遡り、私は橋の下へ帰ることにした。一切合切を暴き立てる陽光は耐え難い。

途中、帽子代わりにマネキンから拝借した金髪頭の老人が座っていた。この風変わりな爺は達人だと噂されているが、誰も何の達人なのかは知らない。

立ち止まった私があるもの言わぬうち、爺は一頭の仮面を差し出した。目と口に丸く虚ろな穴が空いているだけの稚拙な仮面。受け取ると寝息をたて始め、もうこちらを見なかった。

こんなでも顔には違いない。先程の仕打ちをどこかで恥じていた私は来

た道をとって返し、横臥る女の顔にそつと被せてやった。すると見る間に膚と溶け合う。その顔がもげそうな勢いでこちらを向いた。

「もう死にます」

動かぬ丸い口から漏れた声に、私は。

叫べなかつた。

掌に触れるのつぺりした感触。

欄干に走り寄つたが水面は遠すぎた。

土手の叢で行儀良く並んだ子供が黄金虫を歌っている。

「おマへだよオマへ」

所構わず搔き篋りたくなる声が笑う。胸元にへばり付いたままのゴミだ。

「ミんナミンな」

女が肉の川に流されて行く。膨らみ始めた腹の中、何かのたうつっている。目と口は三日月型に。月が満ちる。

私は必死に追いつかり、仮面を引つ剥がして血まみれのそれを顔に貼りつけた。そして奴をつまみ上げる。

「ナなんてコトだ、ああ」

「煩いぞ虫けら」

苦い。

だが噛み続けた。いつかは甘くなるはず。そうしたら別の梯子を登ろう。

まだ歌っている。嫌な歌だ。

そうは思わないかね。

02 「背中」

グラタンの焦げ目

その男はカウンターの一番奥で、いつも疲れの滲む背中を丸めていた。最近よく見掛ける男で三十代だろうか、ただ一人黙々とロックグラスを傾けている。もつとも私も同じようなもので、人の事は言えないのだけれど。

その背中が気になり始めたのは、様々な場所で見掛けるようになってから。ある時はこのバーで。またある時は暗く人通りの少ない道端で。

男が店を出た後、さっきの人よく来られるんですか？ と、私はマスターに声を掛けた。マスターは訝しむような顔のまま、何も言わずに頷いて苦笑いを残す。

それは一週間ほど前からだった。初めて見たのは勤め先で、DVDを借りに来た客として。地味な背広に映えるネクタイの青。一瞬顔を上げた時に目が合つて、咄嗟に俯いたものの感じる視線。あの日からその視線は続いていて、戸惑いの毎日を送っていた。

会計を済ませて店を出ると男はすでに消えていた。ポツリポツリとスナックの看板。なんでこんな所に一人でいるんだろうって、たまに思う。誘われるのを待っているのか、いいえ、そんな事は無くてただ一人で飲みただけ。ならば部屋で一人飲んでいればいいじゃん、とも思うけれども、そんな事を考えている内にコンビニの明かりに包まれた。ここまで来ると、もうウチに着いた気分になる。

お茶とカップ麺をカゴに入れて雑誌コーナーへと向かうその時だった。あの背中が雑誌棚の前にあった。私の心臓は一瞬跳ね上がり、踵を返してレジへと向かう。会計を済ましている間も私の意識は背後に集まる。待ち

伏せ？ 私の行動範囲は知られてるのか。

コンビニを出てすぐの所、幹線道路を渡る歩道橋は暗い。街灯と街灯の間に横たわる闇を緊張しながら歩く。と、自分以外の足音が背後から追る。ような気がして、私は思わず小走りとなった。遠ざからない男の靴音、揺れる橋。怖くなって思わず駆け降りる。

マンションに帰って鍵を閉めると、玄関で胸に手を当てて息を整えた。もしかしたらストーカーかも知れない。だとしたらなんで私なんかを。布団に入っても男の事が頭から離れなかった。

次の日もずっと男の事で頭がイッパイで、仕事の手が付かない。いつ客として現れるかも知れない。いつも私の事を物陰から覗いていて、気付いた時はいつも後姿で、そんな毎日が続いて来た。けれど、もし万が一、ハッキリと告白なんかされたら私……。そんな事ばかり考えている内に日が暮れて、そろそろ退勤時間だと言うのに男は現れない。でも一昨日借りて行ったDVDは新作だから、今日返却しに来るのは間違い無い。

モヤモヤしたまま過ごすのはもううんざりしていた。私がレンタルショップの正面にある喫茶店で紅茶を啜っていると、やがて男が前の通りに現れて店へと入って行った。

店から出て来るのを見計らって私も喫茶店を出る。一定の距離を保ったままその広い背中を追って、幹線道路は交通渋滞。男は歩道橋の階段を昇った。渡った先の住宅街には私の住むマンションがある。やがて階段を昇り切った所で、不意に男の足取りが速くなる。焦った私は小走りになって追い掛けていた。歩道橋の下は光溢れるヘッドライトの川。このままだと逃げられてしまう、と思った私は思いきって手を伸ばし、指先でその肩を軽く叩いた。

びっくりして振り向く男の顔を見届けて、私は呼吸を整え、気持ちを落ち着かせ。その時、頭上から思いもよらない言葉が降って来た。

「あんた、私に何か用なんですか？ いつも人の事つけ回して」

「え？」

「なんだか急に顔が、特に目頭が熱くなって来た。」

「ご、ごめんなさい、別に、そんなつもりじゃ」

「なんで謝ってんだらう私。」

「あんたレンタルビデオ屋の娘だろ。駅前のパールで飲んでればチラチラこっちばっか見てるし、ストーカーか？」

「え？ 私が？」

「す、すいません」

気付くと私は駆け出していた。胸がドキドキしている。追い掛けていたのは、私の方だったのだろうか。

03 「サイドブリッジ」

エウロパ☆

僕の住む街は都会ではない。しかし、こうして朝の渋滞に引っかかっていると、さほど田舎なわけでもないとも思う。要は中途半端で面白味が無い。全く僕に似すぎている。いや、この街で育ったのだから、当然と言えは当然か。

ハンパな自分が嫌いだ。渋滞のピーク時に、ノコノコやって来る僕は、

本気で馬鹿なんじゃないか？と勘ぐりたくなる。断続的に進む車列に合わせて、アクセルを開いたり閉じたりと忙しい。ポツと吐いた紫煙は、窓から外へと流れ出て行く。

国道へのバイパスの橋にさしかかった時。ヒーンと言う、とがり笛が耳をかすめた。

「あ、そういえばココだっけ……？」

まだバイパスの出来る前。この道は砂利道で、用水路に架かる小さな橋があった事を思い出した――

あれは僕がまだ中学生の時、門限があった頃の話。たまたま帰りの遅くなった僕は。早く家に帰らなきゃの一心で、砂利道を、息切れ切れになりながら走っていた。

そして僕は初めて見たのだ。

キス、と言うモノを。

それは用水路に掛かる小さな橋の上にあった。男女が抱き合い。顔をくっつけている様子。

いくらテレビや雑誌で見えていても、実物はさすがにうろたえた。暫く呆然としていたが、急に親父の顔が浮かぶ。

帰らなきゃと。

しかし過ぎ去るにはあまりにも橋が狭く、重なっている男女の横を通るには勇気がある。

僕は無になった。

気持ちの上で、完全に透明な人物になり、存在感を消して、通り過ぎる事にしたのだ。

男女は僕に気付いて離れる所か、さらに押し付け合う。

意識せずとも見てしまう。そして男女が重なった状態のまま。女のと僕の目が合う。

ぶるっ

恐怖とは違うが、怖い。同時に鼓動が高鳴る。走って来た時とは比べものにならないほど激しく心臓が震えた。

僕と女は視線を繋いだまま、体だけが遠ざかって行った――

ぶるっ

僕は車内に吹き込む風に、震えた。

パーー！！と後続車がクラクションを鳴らす音。

僕はいつの間にか、車間を広く開けて走っていたようだ。

やれ。まだまだ子供で、半端だな……。けど。

僕は煙草を灰皿に押し付けて、アクセルを開いた。

少し面白いじゃないか。

END

04 「橋上夢路」

ついでむなはと

私は立ちこめる霧の中を歩いてた。視界が悪く、数歩先の世界は白く溶けている。他に橋を渡っている人はなく、足を踏み出す度に、靴底が橋板を叩く音が鈸する。

如何程歩いた頃だろうか、目の前に姫が出現した。私が歩いていて近づいたと言うのではなく、唐突に現われたようだった。霧のせいでそう思えたのかもしれない。

姫は欄干に寄り掛かってだらしなく座り、生気の無い目で宙を見つめている。なるべくそちらを見ないようにして、私は足を早めた。

「何も払わずに、あんたは行けるのかえ？」

私が真横に来た瞬間、姫が口を開いた。

驚いて振り向くと、姫は片方だけの目で私を見上げて口角を歪めた。檻に隠れているが、どうやら足も左側しかないようだった。

「行けるわ」

この橋の向こうへ、ということだろう。私は自信を持って答えた。

「そうかねえ……」

ただでさえ皺ばかりの姫の皺がより深くなった。それが癪に障り、私はもう一度「平気よ」と答えた。

ならそうするが良いさ、と姫はくつくつと声を立てて笑う。私は姫を無視して歩きだした。再び足音が響く。

しかしいつまで経っても橋の終わりは訪れない。段々と歩くスピードが上がり、首に掛かったリングのペンダントが揺れる。

息の切れるまで走ってもまだ橋は終わりにならなかった。立ち止まって、荒くなった息を整える。目を凝らしても、先は霧に阻まれて見ることが出来ない。振り返っても、白い海が揺蕩っているばかりだ。

この橋は何なのだろう、と思った。

これだけ走って、それでも終わりが見えないなんて。

「言ったらう？」

びくりと身体を震わせて振り返ると、すぐ横の欄干に凭れ掛かる姫がいた。さつき擦れ違った筈なのに。

「ただ通り抜けることなんて、出来やしないのさ」

いくら大切でもね、と付け加える。

「……………」

私は答えずに、ペンダントの指輪を摘んだ。小さくて、メッキの剥げかけた、古びた物だ。

守られなかった、幼い日の約束。

恐らく向こうは、覚えてすらいないのだろうけれど。

判読しづらいが、証として中に互いのイニシャルが彫ってある。

「……分かったわ」

しばらく迷ってから私は小さく呟いて、首からチェーンを外した。鎖を付けたまま、老婆へと投げ付ける。

「毎度あり」

確かに私は姫に投げ付けたのに、指輪は彼女にぶつからなかった。代わりに、遠くから小さく水音が聞こえた。

「これで良いんでしょう？」

私は言い捨てて、また左を向いて歩き出した。

大股で数歩、それだけで足下の材質は木からアスファルトに変わった。橋を抜けたのだ。

いつの間にもやらの霧は晴れ、私の目の前には基盤の目状の町が広がっていた。迷わずに中央の道を歩き始めると、遠くから喧騒に交じって私を呼ぶ声がした。

†

目を明けると、さわやかな朝の光が部屋中に満ちていた。寝返りを打って目を閉じると、遠くで雀の泣く声がする。

何か大切なものをなくしてしまったような気がしたが、それが何だか思いつけない。何だっけ、と落ちてくる髪を掻き上げて考えるが、覚醒する頭と反比例して夢も切羽詰まった感情も薄れていつてしまった。

「……ま、いつか」

小さく呟き、私はゆっくりと体を起こした。欠伸をしながら伸びをする。窓の外は、今日もいい天気だ。

眼鏡を取ろうとサイドテーブルに手を伸ばすと、小さな指輪に手が触れた。

「何だろ」

安っぽい、少しメッキの剥けたリングが、銀の鎖に通されている。ここにある、ということは恐らく私の物なのだろうが、見覚えはない。

不思議に思いながらくると弄ぶうちに、内側に何か彫ってあることに気が付いた。しかし汚くて解読できない。みすぼらしくて、とてもじゃないが着けて歩くことなんて出来やしない。なぜ今まで取っておいたのだろうか。

「いらぬいな、これ」

私はその指輪をごみ箱へと落とし、綺麗なネックレスを探すためにその下の引き出しを開けたのだった。

05 「翼無き偶像」

ガルグイユ

強く逆巻く烈風が荒れ果てた大地の彼方より吹き付け、砂塵を叩いて石の我が身を浅く削ぐ。

陽光は容赦なく降り注ぎ、朽ちた我が身を焼き焦がす。

大気は干涸びて地に生命の姿も無く、天に恵みを与える龍の姿は失われて久しい。

果て無き絶望に覆われた、彩色を失いし世界。
全てを失いし、この世の果て。

我は翼無き天使。この長き橋を渡りゆく旅人に祝福を与える者なり。

我は地に堕ちた偶像。破壊と欲望に全てを奪われし者なり。

今生に魂を受け、幾千の季節を数えた。

最後の旅人に祈りを受け、幾千の昼と夜とを越えた。

翼は折られ、天に向かう指先は奪われ、地に翳す掌は形を変え、眼は光を失った。

かつてこの地に始まりが有った。

流浪の民は永住の地を求めて旅し、この場所に根を下ろした。人々は歴史を紡ぎ、文明を築き上げ、やがて大河に石の橋を渡した。巨大な石より我を削り出し、橋の中央に据えた。我はそうして生まれた。

かつてこの地に繁栄が在った。

世は安寧に抱かれ、豊穣に彩られ、種々の花が咲き誇り、鳥は軽やかに舞い、街道のこの橋を渡る人々はみな穏やかに微笑んでいた。

旅人は我に跪き祈り、長い旅路の始まりに祝福を願い、旅の終わりに感謝を捧げた。

汝らは我を愛し、我もまた汝らを愛した。

我は大地に翳した掌で汝らに祝福を与え、旅の健勝を願った。

世は須く愛に満ち溢れ、生きとし生けるもの全てがこの世の春を謳歌した。

かつてこの地に戦乱が渦巻いた。

人々は全身に白銀の冷たい衣を纏いて兩岸に相對し、この長き橋の上で鋼の刃を打ち合い、互いの肉体を刻み、この地を赤く染め上げた。

荒ぶる魂は醜い獣と化し、燃える眼で、憎しみの炎を滾らせる鋭利な眼であらゆる者を睨み据え、その魂を滅ぼさんと破壊の力を振り翳した。

狂気と化した鋼の刃は我が左の翼を砕き、永遠に失わせた。

かつてこの地に衰退が訪れた。

人々の心に暗雲垂れ込め荒みて地に堕ち、与える者は姿を消し、奪う者が世を闊歩した。奪う者達は金色に輝く我の瞳に凍てつく刃を突き立て抉り、我が光を永遠に失わせた。

戦乱は、再び我とこの地を覆った。

鉛の断片が空を切り裂き、鋼の狂気が轟音と共に放たれ、黒き炎が地を焼いた。

狂気の欠片は我の右の翼を貫き、永遠に失わせた。

そしてこの地を絶望が覆い尽くした。

怒れる炎が大地を這いずり、瞬く間に全てを灰にした。
かつての水底は罅割れた土塊に変わり果て、青く輝く平原は乾いた砂に覆われた。

生命の大地は不毛の世界と変貌し、旅人の姿は失われた。
汝らは、全てを奪い、全てを破壊し、全てを滅ぼし、全てを消し去った。

されど。

……されど愛しき旅人達よ。

人よ！

汝ら人よ！

何と愚かなる存在！

斯くも罪深き種族！

何故に生まれたか！ 何故存在したか！ 何故、我をこの地に産み落としかか！

何故に我より翼を奪い、地に墮としたか！

何故に我より光を奪い、我が心を闇に閉ざしたか！

おお人よ！

憎むべき者達よ、憎き者達よ、忌まわしき者達よ！

卑しき欲望の下僕よ！

呪われし魂の権化よ！

猛り狂う悪魔の化身よ！

人よ。遙かなる大地と海と、悠久の刻を歩む旅人よ。

我は永き年月に、憎しみと愛とは決して相対する物では無い事を知った。

我は再び汝らを待とう。再び訪れし旅人に祝福の手を差し伸べよう。祈

りの言葉に耳を傾けよう。

そして汝らに問おう。

汝らの祈りは、我に何を求めるのか。我の祝福は、汝らに何を与えたのか。

汝ら旅人よ、罪深き子らよ。

その旅路の果てに何を見据え、何を目指すのか。

やがて辿り着くその場所に、如何なる答えを見いだすのか。

汝ら旅人よ。

我は再びこの地で待とう。

この身が朽ち果て砂に埋もれ、世界が我を忘れ去ろうとも、我はこの場所を待ち続けよう。

我は翼無き天使。
遙かなる悠久を歩む旅人に、祝福を与える者なり。

06 「ハルトマンの妖怪少女」

三割ボブ

橋の上には妖怪少女がいる。別段出会うのに特別な条件があるでもなく、ただ橋の端から端までを所在なくうろろしている。馬車が通ると道をあけるし、荷台に林檎があればものほしそうな顔もする。橋の上からどこかに行かない以外は取り立てて書くべきこともない妖怪である。町のはずれの橋には何か別の名前もあつたろうが、旧来の領主の名前を取って「ハルトマンの橋」と呼ばれていた。したがって妖怪少女も「ハルトマンの妖怪少女」と呼ばれている。うまくしたものである。

ところが果たして、橋が崩れ落ちた。領主が悪政をしいたために一揆が起こったとか、貧しい国だったので端を直すお金がなかったとか、もろもろの事情は考えられる。が、まあ橋が落ちたには落ちたのである。そう広くもない城下町の月夜に、木石の降る音は低く遠く響いた。

無くては困るから掛けられるのが橋であるならば、即座に修復されるべ

きが橋というものである。しかし、修復されなかった。修復されなかったということは、これ、やっぱり領主なんかいなくなったのだ。貧乏な村だった。時代は移り変わっておった。結局橋は直されなかった。直さなくとも困らなくなっていたみたい。

さて、かあいそうなのが妖怪少女だ。本当にかあいそうだったか。どうしていたかという、谷の下、崩落した瓦礫のところを相変わらず呆うつとしていた。小奇麗だがちんくりんであった。誰かが棲んでいるらしい、と町の不思議のようにはなった。でも、あんなところじゃあ誰も生きられません。そんな不合理なことはあるまい、と、真面目に探すものはなかった。本人はいたのだが。ずっと。

それからずいぶん経った。崖の上ではいろいろあって、いつしか空が見えなくなった。新しい、巨きな方石の群を支える罫線のあれこれが太陽を遮った。虫に見えるけど、こんなにぶおんどすと始終唸っているものか。

妖怪少女はしばらく興味深げにこの石の百足を見上げていたけれど、ようやく飽きた。で、草むしり苦むした瓦礫をうろろしていた。動物はつまらない。

何度雪が降ったか、がさがさと草を分ける音がしたので瓦礫に隠れると、重そうなりユックサックを背負った男が数人、ぞろぞろとやってきた。男達はずいぶんと興味深げに橋の瓦礫をあちこち見て歩く。悪い人ではなさそうだったのでひよっこり顔を出してはみたものの、あれ、どうやら妖怪のことは誰も見えていない。面白い。まるで私、透明人間みたい！と、思ったそう。本人から聞いた話である。

で、思いついた。この人たちについていたらいい気がする。不意に思いついたにはずいぶんステキであったように思います。と、これも本人に聞いた。ただし、どうすればよいかはなにもわからない。

私の居場所は橋である。ハルトマンの橋の妖怪少女である。辞めてどうするか。でも早く決めぬと仕方がなかった。人々は橋の観察が終わったらこの場を去ってしまう。次に人が来るのはいつになるか。ここか。どこか。ええい、と思った。もう見飽きた風景である。馬車も人も通らない、動きのない風景である。

調査隊の一人に懐中時計を持っている人があった。周りの隊員はみんな一様に腕時計をしている時代だったので、一種の懐古趣味であると思われる。あの時の勘は正解だったわ、と少女は今でも云う。ちんちくりんの身体をよりちんちくりんにして、少女は時計に飛び乗った。金属を曇らせながらもずっと動いてきたばねの律動が気持ちよかった。昔、橋を渡る馬車の息遣いに似ていて。調査隊たちは夕暮れには鉄の箱に乗り込むと、妖怪少女のいた崖の上を亘る高速道路に乗って、賑やかな街に帰っていった。そうして、ハルトマンの妖怪少女はシュテルン通り28番街下宿の妖怪少女として、下宿の二階から時折通りを覗くようになった。人の目に映らなくなつたのは残念だというが、そこそこは満足して、所在なくしているようである。

07 「地図にない街」

ピート いさお

爽秋の空の下は、花が咲くのも酒を飲むにも頃合いだ。アスファルトの裂け目からは、季節を誤謬したタンポポが伸び、ドヤ街の片隅では、今日

の仕事にあぶれた日雇い労働者が酒を煽る。

「あ、パンチイ見えた」

道端に寝転んだ段平さんは、制服のスカートを短くたくし上げた女子高生を眺めていた。

「あんな遠くのパンツが見えるのかい？」

「俺あ老眼だからよ、近くの物は見えなくても遠くのパンチイはよく見えるんだ」

段平さんはそう言うと、元の色が何えないほど汚れた乱杭歯の空隙から、息を擦り出すようにシシシと笑った。

「老眼って、羨ましいかも」

僕もつられて笑う。

「歳をとると、自分に都合の良い物しか見えなくなるんだぞ」

「それが段平さんにとつての老眼の定義かい？ でも、今時の女子高生はスカートの下に何か履いてるから、パンツとか見えないんだ」

僕がそう言うと段平さんは、辺りが黄色く霞むほど薄汚れた溜息を漏らした。

「夢がないのう。あまつさえこの老いぼれの慰みまで奪おうとは、何たる冷血漢！」

年寄りの悪罵が始まれば連連と長くなる。僕は段平さんの言葉を早々に無視して話題を変えた。

「ここ暫く仕事に行つて無いね」

「手配師の野郎はジジイはお呼びじゃねえとほざくし、そのうえ今日びドヤ街の寄せ場での労働力確保はナウくねえ。俺らロートルは野垂れて死ぬとよ」

かくいう僕もここ数日仕事にありついていない。高度経済成長を影で支えたこの街に身を寄せる者にとって、平成の風は寒すぎる。

「それじゃあ、大好きなスープも遂に潮時かね？」

段平さんが何歳なのかは誰も知らない。当の本人に聞いても「俺あ六十以上かぞえられねえんだ」と言っただけで笑うばかりだったが、下の方はいまだ現役だという。

「ああ、トルコは今日で卒業だな」

「これから行くのかい？ まあ、あんたのお気に入りにもうす汚い爺さんに抱かれるのが今日で最後かと思うと、ホッとそのポインをなでおろすだろうよ」

いつもの調子で僕が軽口をたたくと、段平さんは口元を器用に振って虚無的に笑った。

「俺あ今日勝負に出るぜ。葉子さんにプロポーズするつもりだ」

段平さんは手に持ったカップ酒を飲み干すと、ゲーッと刺激臭を伴うグツプを放った。僕は段平さんが鼻屑にしているという、気の毒な葉子嬢に激しく同情した。

「あんたみたいな爺さんをスープ嬢が相手にする訳ないでしょ。そもそも仕事もないくせにどうやって食わせていくのさ。え、ヒモ？ あんたヒモになりたいのかい？」

段平さんは僕を睨みつけるように顔を寄せて言った。僕はあまりの口臭に鼻をつまむ。

「ヒモじゃねえ、愛だ。稼ぎはなくても生活保護で食っていける。でもまあ、アンタの言う通り俺あ臭くて汚いジジイさ。そいつあ否めねえ。でもな、葉子さんはこんな俺に『素敵だから特別』と言って、いつもケツの穴まで舐めてくれるんだ！」

段平さんはそう言ってすくと立ち上がると、ひとり歩き出した。正気かジジイ？ それは愛じゃなくてプレイだ。そんな娼妓の甘言を真に受けるとは。もう僕が段平さんに言っただけであられる事は一つだけだ。颯爽と歩くその背中に最後の声をかけた。

「せめて歯は磨いていきなよ」

暮れなずむ夕焼け空に藍が滲む砌、首尾よく僅かな日銭を稼いだ街の間が戻りだし、車座になって夜宴が始まる。僕は自販機で缶ビールを買い、その輪に加わった。

星月夜にほろ酔いになった頃、今ではその名残だけが残る大門の方角からサイレンの音が幽かに聞こえた気がした。

そこで何が起きているのか僕は知らない。ただ、その音を聞いたとき、この街に縁の深い英雄の言葉をふと思い出した。

「燃えかすなんか残りやしない、残るのはまっ白な灰だけだ——」

段平さん、アンタの明日は、どっちだい？

翌朝どろぼう市に向かう途中、僕の目の前でタンポポの種子が舞った。その白い綿毛は気まぐれな風に惑わされ、ふわりと晩秋の空に消えていった

08 「Gold Dusk」

シルバー

小さい頃、近所の橋の上で反復横跳びしてる子がいたんですよ。ええ、それが辻くんです。同じ小学校で、年は僕よりふたつ下。がっしりした体格で腕っ節が強い。それでいて見た目よりもすばしっこい。僕のほうが年上なのに、運動神経は彼のほうが良かった。羨ましかったですね。

そうそう、反復横跳びです。学校が終わった後、辻くんは誰よりも早く橋まで辿り着いて、反復横跳びの準備を始めます。

彼が何のために反復横跳びをしているかというと、小遣い稼ぎのためなんです。橋を渡ろうとする人の行く手を遮って、通行料を要求するわけです。

「五十円おくれ！ この橋渡るなら五十円おくれ！」とね。だみ声で、結構な迫力でした。

要するにタカリとかカツアゲとかいうやつなんですかね。慎ましい金額でしたが、小学生には大事な小遣いです。

幅三メートルくらいの橋を完全封鎖。真ん中で突っ立ってるだけでも事足りたとは思いますが、反復横跳びされると見た目が「行き止まり」っぽくなるんですよ。有無を言わせぬ威圧感がありました。

構わずに渡ろうとすると辻くんはその人を捕まえます。一度捕まると五十円与えるまでは絶対に離してくれません。喧嘩で中高生に勝っちゃうくらい強かったですから、振りほどくことも難しい。

橋は通学路になっていましたが、友達の皆は橋を避けて帰ったり、親御さんと一緒に帰ったりするようになりました。さすがに大人を相手に反復横跳びすると怒られるというのは、辻くんもわかってたんでしょね。

で、僕はと言えば、親が共働きだったので付き添ってもらうことはできない。クラブ活動で遅くなることが多かったので、疲れた体で遠回りするのも癪な話です。そうかと言って無抵抗に五十円を差し出すなんて論外。消去法で、僕は毎日、辻くんを勝負を挑むことにしました。「行き止まり」を突破するのです。

日が傾き、影が長くなった頃、僕は問題の橋を通りかかります。

辻くんはやはり橋の真ん中で佇んでいます。僕の姿を認めるや否や反復横跳びを開始。夕方になるとさすがに彼にも疲れが見えますが、疲れているのはこちらと同じであまり有利にはなりません。

「五十円おくれ！ この橋渡るなら五十円おくれ！」

お決まりの台詞を叫びながら、辻くんは欄干の間を往復します。

僕はその動きをじっと見つめてタイミングを計ります。彼は睨みつけてきますが、僕は目を合わせず、足の動きに集中。

そのまま辻くんが力尽きるのを待つという戦法を試したこともあります。その場合は彼から先手を打って飛び掛ってくるのでアウトです。こちらに踏み出してくる前に、辻くんの横をすり抜けて橋を渡らなくてはなりません。

反復横跳びの足はほとんど浮き上がりません。最短距離で、地を滑るように右の欄干へ移動し、見る間に折り返して左に向かう。

静かな夕暮れに、いつまでも規則的に響く足音。

往復。往復。

その間隙。

辻くんの左足が欄干に向けて踏み出される刹那。

僅かでも早すぎるとスペースが足りず、

遅れると折り返される。

誤差許容範囲は皆無。

その瞬間を狙って、僕は駆け出す。

空いた逆サイドを突っ切り、家までまっしぐらに走る。

斜め後ろで辻くんが反転する気配。

妖怪のように僕を追走。

走力はほとんど互角なので、助走をつけた僕のほうが有利で、タイムイングさえ間違えなければたいい何とか逃げ切れます。それでも三回か四回に一回くらいの割合で敗北を喫し、五十円を献上することになりました。タックルで倒された上に小遣いを奪われるのはもちろん悔しいですが、それ以上に何か清々しいものがありました。戦友として無言で健闘を称えあう、不思議な友情が生まれました。カツアゲされてるのに。

そうですね。僕が銀メダルを獲得できたのは、その頃からの切磋琢磨の賜物だと思います。銀メダル止まりなのはやはり悔しいですが、相手が辻くんですからねえ。

09 「御所の橋の上で」

常盤御前

『笛の音は、母に届いているだろうか？』

ヒュルリヒラリと、笛の音が物悲しく京の町を流れた。

絶世の美女といわれた母の面影を残す遮那王は、梶井御所の前に架かる

橋の手前で立ち止まった。

今では築山殿と呼ばれる母の住む柴野から、鞍馬寺へ戻るところだった。

「すんなりここは通れんぞ」

橋の反対側に大きな法師が立ち塞がっていた。

「もし通りたくば、その太刀を置いて行け」

「近頃現われるという知れ者か。太刀が欲しくば獲ってみよ」

「それではいざ」

言うが早いか、法師は太刀を抜き放ち、一挙に橋を渡った。

遮那王は橋の下に移動していたが、小太刀さえ構えない。

「鬼神と云われるワシ相手に、それで勝てるか」

法師はそう言い放つと片手で切りつけた。

太刀はふんと音を立て遮那王に向かったが、雷の如く太刀を避けた遮那王は、法師の懐へ入り込んでいた。

驚きながらも返そうとする太刀を遮那王は笛で止め、胸をしたたかに蹴

りつけた。

「うげっ」

法師が思わずカラリと太刀を取り落とすと、遮那王はそれを拾いあげ、

ふわりと9尺はある橋の欄干に躍り上がった。

『奴め、鬼神か』

法師は唾然と遮那王を見上げた。

「もう狼藉はするなよ」

遮那王は、その太刀を踏み歪め投げ返した。

複雑に絡み合った木々は昼でも暗く、いつもはねっとり闇が纏わり付いて来るのだが、3日前からの雪もやみ、月が出ているのかこの時刻にな

つても薄明かりが真の闇を遠ざけていた。

鞍馬寺の尊天に祈るべきであるとかとの迷いもあったが、母逢いたさの丑の刻参りである。預けおかれている寺では気恥ずかしさが先にたち、貴船神社の神に心願成就を祈った帰り道であった。

すでに寅の刻になっていた。まだ大人になりきれしていない年端の少年はすっかりとした足取りで雪道を歩んでいた。

突然光が頭上を射し、ゴオと音がしたと思うと地鳴りが足元を揺らし近くに火柱が上がった。

鞍馬寺は、寅の年、寅の月、寅の刻に毘沙門天が天から降りてきて興つたと聞く。しかも今は寅の年の寅の月でもある。さても鞍馬寺の毘沙門の神の怒りかとも思ったが、好奇心が少年を火柱が上がった場所へ向かわせた。

近くの木々が同じ方向になぎ倒され、火は下火になっていたが、木々が向く先には大きな穴が開いていた。少年は穴を覗き込んだ。そこには牛車ほどの大きさの、黒銀で出来た玉子のような物が地中に埋まっていた。

それより少し前。爆発した船から抜け出したビゾは、故障してしまったポッドを近くの惑星に着陸させようと必死だった。

そこは水の多い惑星だったが、何よりも生体反応が多い。今の身体が駄目になったとしても緊急事態だから、着陸した惑星に住む生物の身体に乗り換えれば良い。

ビゾはポッドを操作し、大きな陸地の端から少し離れた陸地になんとか着陸出来た。

しかし着陸のショックで、身体は修理しようが無いほど壊れてしまった。速やかにこの惑星の生物を探す必要がある。

大気成分は問題なし。旨い具合に二足歩行らしい生物がこちらにやって来る。ビゾは壊れた身体から抜け出し触手をヒュンと伸ばした。

少年は足首がひやつとしたと思うと、その冷たさは体中に広がり、直ぐに気を失った。

ビゾは侵入に成功したが、この生物の脳は余り活性化していないようだ。筋力も足りない。ビゾは早速新しい身体の修理を始めたが、この生物の脳を全て活性化するには生物としての許容範囲を超えてしまうようだった。

危険ではあるが、この生物の意識を少し起動させ状態を見ながら調整しよう。

気がつくると少年は自分の能力が高くなっているのを確信していた。しかも自分の身体に何かいる。

意識を集中した少年は、それを身体から追い出し、直ぐに蒸発させた。何故こんな事が出来るのかも、この能力も一時的なものだということも同時に理解していた。

しかし身体能力とある程度の能力はそのまま残るはずだという事も判っていた。

10 「橋の向こう」

オリオン

河から吹いて来る風に立ち向かうかのように、二匹は立っていた。

一匹の大柄なネズミは旅支度を終え、友に別れを告げようと、鼻をヒクヒクさせた。

「そろそろ行くぜ。元気だな」

「本当に行くのかい？」

小柄なネズミは心配そうに大柄なネズミを見つめた。「ああ。もう此処には飽きたからな」

小柄なネズミは、彼らしいと思った。元々旅が好きではあったが、本当の理由があるのを、小柄なネズミは知っていた。小柄なネズミの為だと……。

小柄なネズミには養っている家族がいた。開発が進み、この河辺あたりは、めっきり餌場が減ったのだ。何十匹いたネズミ達は、皆この土地を離れた。残ったのは、大柄なネズミと小柄なネズミの家族。

「また、会いに来るさ。二度と会えない訳じゃない。……泣くなよ、馬鹿だな」

小柄なネズミは知っていた。また会えるとは限らない事を。

それでも、信じてみよう和小柄なネズミは思った。また会えると……。

「またね」

泣き腫らした目で小柄なネズミは呟いた。

「またな！」

出来上がったばかりの鉄筋の橋に向かって大柄なネズミは走り出した。

小柄なネズミは、その背中を見送り続けた。

橋の上で大柄なネズミは小柄なネズミに目一杯手を振ったので小柄なネズミも、大切な友の姿を刻みつけようと、振り返えした。

生きてやる！小柄なネズミは、そう決心して家族の元に走り出した。

11 「待恋橋」

綾之丞

ある紅葉の美しい土地に架かる橋にまつわる、悲しくも一途な恋の話をしよう。

女はただ一人の男を想い、橋の上で木枯らしに吹かれながら佇む。

朱に染まる美しい紅葉に目もくれず、虚ろげな瞳に映るのは橋の欄干。

とりたて目を引くものであるわけではない。女はただそこにいるはずのない男の幻を、その虚ろげな瞳で見ている。

儂げな表情の裏側では、男への一途な想いを胸に抱き、今日も女は待っていた。

男とこの場所で離ればなれになったのは、いつの頃になるか。

女は男と別れた橋の上で待ちながら、季節は一つ巡り、二つ巡り……。

幾度この秋を迎えただろう。数えるのも億劫になるほど、女は待ち焦がれていた。

待つのは苦ではない。

逢えないことの方がつらい。

声が聞けないのが寂しい。

いつも隣にあったぬくもりも、今は風が通りすぎるだけで凍えるように冷たい。

……嗚呼、あのぬくもりが恋しい。

女は抱きしめるように身を縮めた。

男は一人旅で、遠くからやってきた。

紅葉が見事なほど美しいとの評判を聞きつけ、一目見ようとここまで来たという。

朱く色づく紅葉はそれは見事で、男は当然のように目を奪われ、誘われるように歩いてきた所為か、男は道に迷ってしまった。道が分からず困り果てたところ、ちょうど通り掛かった女に道を聞こうと声を掛けた。

これが二人の出逢い。

女が振り向き、お互いに目が合った。

それだけ。

どちらともなく惹かれ合い、近づき、触れ合うようになるのにさほど時間は必要なかった。

一目惚れ。そういう出逢いも珍しくもないが、互いにそうになると、運命としか言いようのない出逢い。赤い糸を初めて信じた瞬間。

この運命の出逢いに、女は男が旅の間、片時も離れずにいた。

男は女の絹のような白い肌も、艶やかな長い黒髪も、声も何もかも全てを愛した。

女は固くも暖かな胸のぬくもりも、逞しい腕に抱かれることも、名前を呼んでくれる声も、全てに至福を感じた。

愛し合う二人は比翼連理。

想い思われ、愛を深めた。

そんな幸せも、紅葉が散り始め、秋が終わりを告げる頃、二人の逢瀬も終わりを告げる。

男の旅は終わりを迎えようとしていた。

片時も離れたくない女は、別れを拒む。男も気持ちは同じ。だが、現実は無情に二人を引き裂こうとする。

できることなら連れて行きたい。攫っていききたい。そんな衝動に何度駆られたか。男は愛する故に苦悩する。

女も、離れたくない。別れたくない。いつそのこと付いていききたいとさえ思うようになる。可能ならば夫婦になろうとも。

しかしそんな女の決意に気付かない男は苦悩の末、女の願いも空しく、女を置いていく苦渋の選択をしてしまう。

身を引き裂かれるような選択に、女はそれでも男の意思を尊重することにした。

自分の我が侘を通すことはしない。ただ、できることなら自分のことを忘れないで欲しいと。

いつか迎えに来て欲しいと、泣きすぎる。それだけしかできなかった。

橋の上に男と女。

男はどうすることもできない自分への弱さ、情けなさ、そして女への愛が入り交じる悲痛な面持ちで女を強く抱きしめる。

ぬくもりを、匂いを、感触を忘れぬように、強く、強く……。

しばらくそうして、男は荷物を片手に、女への未練を振り切るように背を向けて歩き出す。

女は男の名を叫ばないよう、唇が震えながらも口を紡ぐ。男の覚悟を揺らがせない為に。握り込んだ手の平に爪が食い込んでも、痛もうとも、耐えた。

そうして耐えた女は、男の背中が見えなくなった途端、堰を切るように泣き、男の名を叫んだ。

女は今日も橋で待つ。

美しかった容顔は皺が目立ち、長い黒髪も今では白くなり、女は老婆となっていた。

男は来ない。

季節が一つ巡り、二つ巡って、幾度の秋を迎えても男の姿はまだない。

やがて、橋から女の姿が無くなり、また次の秋が巡り、紅葉が散り始めた頃、一人の老人が訪れた――。

12 「明日に架ける橋の上」

おんこしん

街道に出ると、大型が我がもの顔で飛ばしてた。助手席では、サブちゃんが、抱え込んだポリタンを指で弾きながら、舌を器用に震わせてリズムを刻んでいた。ゼンマイを巻き上げるような音色の繰り返し、ギロの音色とわかつたので、僕は口でベースを合わせて、イントロを三回繰り返し、たところで、サブちゃんが歌った。

うえんざ、ない、はず、かむ……。

Stand By Me
B. E. King

「なあ、ヨシクニ君、自転車の荷台は『助手席』たあ言わねんじゃねえか。読んでる人が誤解すんぞ」

ワンコーラス終ったところでサブちゃんが言った。

「でも、サブちゃん。荷台って書くと、実用自転車だつてばれちゃうし、僕にも見栄があるからさ。第一、自転車の二人乗りは交通違反だし……」

「バカ言ってるじゃねえよ、これからもっともの凄ンげえ法律違反しに行くんだから。大事の前の小事ってやつだ。堂々と書け、堂々と」

そう言ってサブちゃんは、ツーコーラス目を続けた。

幼馴染み（近所、小中が同じ、学年はひとつ違い、サブちゃんのが上）のサブちゃんが、突然、

「火い点けに行くから」

と目を三角にして（頭から湯気吹いて）僕の家に来たのは、午後九時過ぎだった。

『以前からイクスカねえ』先輩社員（三流大学、一浪一留）に今日、『高校中退』というサブちゃんの人生の中で一番（現在までのところダントツで）触れられたくない（デリケートな）部分を（入社以来密かに懂れている）『陽子先輩』の前で暴かれ『顔からマグマを噴く程』の『大恥をかかされた』そうだ。それで、その先輩を『火あぶりの刑に処す』べく、住所を調べたら、僕の実用自転車で一時間程の（川向こうの）隣町にお住まいだったので『ヨシクニ君にお願いするに至った』と拝まれた。

サブちゃんは、事前準備として道中『ガソリンを調達』を成すべく、大きいポリタンと頭の赤い手動式給油ポンプ（シユポシユポ？）を携えていた。

「ヨシクニ君、モノローグが長過ぎ。それに俺は年長者なんだから、『サブちゃん』『サブちゃん』と『ちゃん付け』で繰り返すのは、教育上いかなもんかな」

ツーカーラス目を歌い終えた「三郎さん」は、早口で以上を述べると、リフレインに入った。

だーりんだーりん、すたん、ばあみいいい、おおーすたん、ばあみい……

三郎さんは、その陰湿な目的とは裏腹に異常に上機嫌だった。
「放火って、重いらしいっすよ。罪が……」

「んなことは、先刻御承知だよ。昔は火付盗賊改方が、そして今は、甲殻機動隊が担当してんだ。捕まったら十年、いやあ二十年は刑務所暮らしだな。安心しろ、ヨシクニ君の名は出さん。あはははは」

「でも、刑務所じゃあ、サブちゃんの好きなオールディーズも聴けないっしょ」

「ヨシクニ君、バカをおいでないよ。俺らの音楽には、何とかポットもケータイも電気すらもいらねえんだ。俺らの音楽は、つまり、いつもハートに詰ってんだ。脈々と流れてんだ。だから、たとえ刑務所に入ろうが、人生は音楽と二人三脚。不自由はしねえ」

うえんえばゆいんたあぼおうおんちゅー、すたん、ばあみい……

その後、道すがら、路上駐車燃料タンクをこじ開け、赤いシユポシユポで、ポリタンに移し盗って、サブちゃんと僕は夜を爆走した。実際は、ポリタンが重く、蛇行運転しながらだった。

実用自転車はいよいよ、隣町との境の太鼓橋にさしかかった。

「よーし、あの橋を渡れ！ 俺たちの希望に向かって、ヨシクニ君、あの『明日に架ける橋』を渡るんだあ」

そう叫ぶとサブちゃんは、助手席でポリタンを揺らしてS&Gの同名曲を歌って踊った。そうでなくても不安定な実用自転車は、思いつきり左右に振られ、あつという間も無く、橋の欄干に激突。サブちゃんは、暗い水面に消えた。

駆けつけた救急隊員に助けられ、一命は取り留めたが、『天下の火付盗賊』は、あえなく『ずぶ濡れ窃盗犯』に成り果てた。

13 「くじら尺禁止法」

Tバックハイスクロール

世界各国を巻き込んだ大戦から十数年。列強国に肩を並べるべく、政府は国際基準の計量法を準拠する為、昔ながらの尺貫法の使用を禁じる法令を発した。

世に悪名高い、尺禁法時代である。

忙しく走る男と女が、すれ違いざま肩をぶつけたのは、ちょうど西日の差す橋の真ん中だった。男が抱えていた細長い包みを取り落とす。男の後から追いついたもう一人が素早く包みを拾い上げ、荒く息を吐いた。

「観念しやがれ、ヤミものさし屋」

ヤミものさし屋と呼ばれた若い男は、振り向くと同時に包みを拾った中年男の腹を蹴った。包みが軽やかな音を立てて落ちる。欄干のない小さな橋の上で、中年男は辛うじて持ち堪えた。落ちた包みを、今度は女が抱え上げ、ヤミものさし屋を見据えた。

「あんた、これは二尺さしかい？」

妙齢の女の必死めいたもの言いに、彼は怪訝に眉根を寄せる。

「その通り。そいつは違法なくじら尺のものさしよ」

得意げに胸を張って、包みを渡せと手を出す中年男を振り払い、女は語気を強めた。

「このものさし、アタシに売ってくれ」

「まてまて、そいつはなんねえ。尺さしを買うのも売るのもご法度だ」

「ちよいと待ってくれ、おかみさん。刑事さんも」

ヤミものさし屋が口を挟む。

「そいつは尺さしなんかじゃねえ。ただの竹の棒切れだ」

「嘘をつくな。お前がヤミで尺さし作ってんのはバレてんだ。神妙にしるい」

ヤミものさし屋が包みに手を掛け、刑事が彼の腕を掴み、女が包みを渡すまいと身を振ってもみ合う。

下を流れる川辺で釣りをしている子供が一人、橋の上を眺めて目を細めた。茜の空に影絵のように浮かび上がる大人達の喧騒に、遠く祭囃子が重なる。

「冗談じゃないよ。家には年頃の娘がいるんだ。今度の花火大会までに浴衣を縫ってやらなくちゃ。去年のつんつるてんなんて着せられるかい」

体をくの字に折り曲げ抱え込む包みを、なんとか取り上げようと刑事が女の腕を解きにかかる。

「そんならメトルのものさしで測ったらいいじゃねえか」

「なに言ってるんだい。昔っから、袖付け六寸身八つ四寸できっちり決まってるのに、今更センチメートルなんて中途半端なもんでやってられるかい」

「尺さしを使うのは禁止されたんだ。逆らうとあんたも逮捕するぞ」

女が刑事の手を払った途端に、ヤミものさし屋が包みを取り返し、川へと投げ込んだ。水音に川辺の子供が目を瞠る。

女と刑事の驚き訝しむ視線を見返して、彼は不敵な笑みを浮かべた。

「俺は尺さしなんか売っちゃいねえ。おかみさんも尺さしを買ったりしてねえ。あれはただの竹棒だ。尺さしだってえ証拠はねえ」

暗い川面を緩やかに流れる包みは、やがて子供の釣り糸に引っかかった。刑事が小躍りして、それを渡せと子供に呼びかける。しかし、子供は白い歯を見せて、橋とは反対方向に、包みを持って駆け出した。

「あのガキ」

刑事が慌てて追い掛け、にやけたヤミものさし屋と、力なく座り込んだ女が残された。日差しを吸ってまだ温いモルタルの橋の上で、二人の影が重なる。

男が腰を屈めて女に囁く。

「今夜、天神様の夜市に来な」

驚いて顔を上げると、男の悪戯っぽい眼差しと目が合った。

「ちゃんとした二尺ざしを渡せるぜ」

ヤミものさし屋が口の端でにやりと笑う。

子供が路地を曲がる時、もう一度こちらを見て包みを掲げた。男がそれに応えて手を振る。女は不意にそれが何かを理解した。

——あれはやはり二尺ざしなのだ。

川面をいく涼やかな風が、祭囃子を乗せて流れていった。

14 「Mr. ソールマン」

男魂

心臓が悲鳴を上げる事も厭わず俺は走り続けていた。

彼女が、彼女が待っているのだ。

ってなんのことはない、初デートに着て行く服をカジュアル系にするかフォーマル系にするかで、迷ったことで時間を大幅にロスした結果の事態である。

しかし白いスーツに白いエナメル靴、風にはためく白いマフラーのなんと走り辛いことだろう。しかし今は気にかけている場合じゃない。

猛烈なアタックの末に、ようやく取り付けた約束なのである。一分でも遅刻しようものなら今までの努力が全て水泡に帰すであろうことは想像に難くない。

あの歩道橋を渡れば駅は目の前だ。

ダメだ、心臓が爆発しちまう。いや、駅まで持てば良い！

一足飛びに歩道橋の階段を駆け上がったところで俺は愕然とした。ちようど橋の中央付近にバナナの皮を視認したのだ。

しかも間の悪い（良い）ことに女子高生の三人組というギャラリー付きである。

何を考えてるんだ俺！ 今はウケを狙ってる場合じゃないだろう。

しかもご丁寧にバナナの皮の先には、昨日降った雨が綺麗な水溜まりを作っているではないか。

や、やべえ。無茶苦茶おかし過ぎる状況だ。

堪える。堪えるんだ俺。

ここを耐えればミポリンとの甘い生活が待っているのだぞ（のはず）。

俺はスピードを落とさぬままに、軽やかにバナナの脇をスルーする（ちよいウケ）

よし！勝った！

母さん、俺は誘惑に打ち勝つことができました。

あとは駅まで一息だと思った瞬間、すれ違う女子高生の一人と目が合った。

なんだその期待外れ感丸だしの眼差しは——！

思うのと、青い空とお友達になるのはほぼ同時だった。

次いでくる水浴びの時間に、はかない恋は散った。
不思議と涙はこぼれずに、ただただ満足感が心を満たした。

どうなるかなんてわからない、でも、苦しく耐えるより可能性はある、
もしどんなカタチだとしても穏やかな終わりが訪れるのなら、私は迷わず
選ぶだろう。

「もう五本目……煙草吸い過ぎだよ」

15 「橋の下」

多田ちよこ

いっそ楽になろうか？

橋の下から少し上ずった若い男の子の声が聞こえた、いや正確には聞こえ
たような気がした。

「つたく、どういう幻聴よ」

そうしてしまうことが現実の当たり前の延長線上だったり、選択肢の一
つなのだから。

私は自分の聴覚を確かめる為にも、大きめの声で独り言を呟いた。いくら、
寂しいからって、オトコに注意される声なんて聞きたくもない、何本吸っ
たって怒られなくなったのが、せめてもの救いなのに……

「路上禁煙区域ですよ」

もうしなくてもいいのに、日課になってしまった真夜中の散歩、私は独
りぼっちで踱んだ善福寺川を眺めながら、関根橋の上で甘い香りの煙草に
火をつけた。

ありや？これ幻聴でも妄想でもない？

モゾモゾクマクマ

橋の下、声のした方を覗くと川沿いでモゾモゾとキヤラメル色のクマが動いている、キグルミのクマが……

「あの、申し訳ないんですけど煙草、目立つので止めてもらえますか？」

クマのくせに臆病だ、私が警察に注意されたって橋の下のあんたが見つかる可能性なんてほとんどないんじゃない？ むしろ、隠れてるんなら、私に声を掛ける方が危険性は増すような気がするけど。

「これが終わってからもいいかしら？臆病なクマ君」

「うん、でも、今日で最後にして、明日からは別のところでオネガイシマス」

え、私は毎晩ここで一服してるのよ、なんであたしが移動しなきゃいけないの？

「明日、そこから消えてるのはあんたの方よ、声からして、まだ養ってらってる年齢でしょ？お家にオカエリ」

「お姉さん、頭良くない？帰りたくないからここにいるんだよ」

あ、たま……って、いや、ここで怒っちゃいかんね。

「では、しかるべきところに保護していただきましょうか」

彼はゆっくり川沿いの縁に腰掛けて、ふわふわの手で耳を撫でながら話し始めた。

「白状するよ。」

僕は警察—— いや、きっと、もっと上の組織に追われてるんだ、家族も信頼できない、自分の部屋に帰るとグチャグチャに荒らされていた、パソコンが壊され、ケータイも盗まれた、それに黒い車が僕の後をついてくる、それにそれに耳の裏の皮を触るとなんだかコリコリした塊が埋まってるんだ」

こいつ、アブナイ子、てか私もクマな段階で気が付くべき？

「で、キグルミクマで変装なの？」

「お姉さんは信じてくれた？」

これ以上からむべきじゃない、煙草も吸い終わった、うん、帰ろう。

「あたし、帰る」

「うん、だよね、さよなら」

あっ

「そえば、臆病なクマ君、最後に一つだけ質問」

「はい、どうぞ」

「あなたは、なぜ私に話しかけたの？」

彼は、橋の下から私を見つめて言う。

「それはね、僕はこんなに困難な状況に立たされているのに、どうにか頑張って生きている、それなのに……」

「なのにあなたは、どうせ、なんでもないことだろうに、そこから身を投げようと……」

「そ、ありがとう、勇敢なクマ君」

悔しかった、こんな誇大妄想狂に私の心を見透かされてるみたいで――

だから、飛び込んだ。

高さも微妙、流れも速くない、こんなところで死ぬるのは相当な幸運の持ち主だけだったのに。

「まさかホントに飛び込むなんて、この橋ちょっと高くって怖くなかった？」

私は迂闊にも気絶していた。

そして、びっしょり濡れたクマの膝に、頭を置いていた。

「ありがとう、助けてくれちゃったんだ。まさかホントに飛び込むなんて、思ってたかったわ」

最悪だった。

びしょびしょだし、体中痛いし、それに――

臭い……

「ねえ私と、橋の上に行きましよう」

「はい？」

「そして、私のウチまでおぶって行きなさい」

「はい？」

「お風呂貸してあげるから、男物のパジャマもあるしね」

「……………はい」

「あなた、臭いわ」

終

16 「寝食の浸食」

意識の滲青

自分の部屋が大変に片付いていないということに気づくのに私がどれだけの時間を要したのかは、この壮大な光景を見る限りでは容赦なく嫌気がさすほどのものであると容易に推察され、その時間に私はこの部屋で毎日

寝食していたかと思うと自らの精神がどこか破滅的に破綻していたのではないかと他人の奇行のように気色が悪くなり、私は自分が今ようやくこの部屋の異常な散らかり様を客観的に見える程度の冷静さを取り戻すまで何かに取り憑かれていたのではと自失したが、部屋に置いてある例えば本を一冊手に取ると、そこにそれが置いてある理由もしくは置かれていても不思議でない自分の営みが想起され脳が閃いたように沸き立ち、郷愁とそれに付きまとう嗅覚的な刺激を与え私を冷静に焦燥を含んだ覚醒状態にさせるのだった。

私はこの部屋の片付けに軽度の畏怖を感じ身悶えしたが、自分が少しでも冷静であるうちにこの部屋を片付けなければ、私はこの部屋に精神を支配されてしまう——私は部屋の片付けについて明確な方法論を持っていたはずだ。それは「本棚に入った本は一度、すべて取り出す。それを元の本棚に戻したとき、五十音順などの明確な規則を用いていない限り、それはそのときの気分による『新たな』自分の美学法則によって並べられる」という発見を「規則性の無い収納状態を一度リセットすることで、再度収納する際には、元の状態に戻ることはない」と敷衍し、部屋全体を「収納」と置くことで「一度部屋の物を外あるいは隅に追い出し、それを再度部屋に戻すことで気分を一新するのに十分な部屋の片付けを行うことができる」というものであり、この過程で『必要なもの』以外は捨てる。『不要なもの』という観点だと曖昧なものが多くなり時間を浪費するだけなので、ゴミと今までの生活で使用していなかったものは惜しまずに思い切って捨てること」も重要である——寝食の浸食、あるいはこの虚無が氾濫する自我と自我を渡す橋上で、この精神状態がどこまで持続する・・・のかは分からないが、私は覚悟を決めた。

私は部屋からあらゆるものを部屋の外へ追いやる。「あらゆるもの」と括弧のようにそれが何であるのかを意識せず、とにかく外へ外へ。本、CD、DVD……それらの熱心に収集した情報媒体すら時間と共に興味を失い、価値の無い「あらゆるもの」になっていく。私はそれらの情報媒体によって多くの人物の表現を通じた感性に触れながら時間を失っていく。私はそれらを購入したい一心で時間を労働として売り、結果として未読の本、未聴のCD、未観のDVDが積み上げられていく。時間の浪費・無駄・荒唐『Waste』。こうして生活行為が犠牲になっていく。私は何を得たのだろう。何か大切なものを失っていく気すらしてしまう。

部屋の外に不安定に積み上げられた「あらゆるもの」はどこか美しく、様々な感情を私にもたらした。私はこれらが物理的に視覚的に存在するのとに安堵した。ここにある情報は今の技術ならコンパクトな媒体に収納できるのだろう、だけどそれはきつと私の所有欲を満たさない。知識欲はいつだって所有欲を喚起する。情報を集めることと消化すること、私は今ここにこの情報ですら十分に消化できていないが、集めること・所有することで満たされる気持ちを私は決して無駄だとは思わない。ここにあるものは確かに私のもので、私の感性を視覚化したものなのだから。

理論や理屈で割り切っても一向に片付かない部屋で私は紫煙をくゆらせる。

17 「ウメちゃんのいた日々」

樋口紅葉

まだヒンヤリした空気の感触の残る早朝。橋の上から眺めるこの景色に、正直驚いた。

人々が毎日のようにたくさん集まるのは、この美しい景色に気づいたからかもしれない。

幼い頃からこの街で暮らしてきた私にとって、この梅崎川は都会の汚いどぶ川だと思っていた。

だがこの日は朝日が煌めき、冬空の澄んだ朝焼けを川面に写し出すというえもいわれぬ美しい瞬間に立ちあうことができた。

この川にアザラシのウメちゃんがやって来て、連日ものすごい数の見物人がやってくるようになったのはここ最近だ。ウメちゃんを見るつもりで来た近所の人々も、いつもは見ようと思って川を見ることなんてなかったと思う。私もそうだった。

天気が悪くても、時間帯がずれても、橋の上から見るこの景色は、遠く細く曲がりくねる川の様子が、その時々表情を変えてよく見えた。そのことに今まで暮らしてきて、ずっと気づかなかった。

気づけたのはウメちゃんのおかげだ。

橋の上は穏やかな時が流れ、ウメちゃんがいるから川面を覗くみんなの顔も優しく、ウメちゃんの姿が見えなくても、共通の話題があるから「今朝はウメちゃんが見えませんか」なんて、知らない人とも会話が弾む。

ウメちゃんにはお気に入りのお護岸があつて、そこで休んでいる時が多い。お腹が空くと川に潜って鯉を食べているようだった。

うちの娘もこの橋の上から、ウメちゃんを見るのが保育園のお散歩コースになつていて、今日のウメちゃんの様子」を毎日教えてくれた。私は通勤途中にウメちゃんを探しながら橋の上を通りすぎる。もちろん野生の生き物だからいつもそこにいるわけではなかったが、なんとなく「ウメちゃんいるかなあ」と気になつてしまうのだ。

けれども、ある時自然保護を訴える男がダイバーの格好をしてウメちゃんを捕まえようとしていた。役所の許可もとつてあるようなことを主張し、報道陣に対してその文書を見せている姿をテレビで見えて驚いた。

でも一番驚いたのはウメちゃんだったろう。

この日からウメちゃんを見ることはできなくなった。

ニュースによると、海に出て千葉の方に行つてしまつたらしい。

ウメちゃんがいなくなつたら、人々は橋の上に集まらなくなつた。

私も立ち止まりはしないが、この橋の上を通ると自然に遠くを眺めるようになった。ウメちゃんがいなくなつても、ウメちゃんが現れる以前の自分とは違う私がいた。

今日も空気が澄んでいる。川沿いに並んで植えられている葉の落ちた柳はその長い枝を冷たい風に揺らし、遠くの家々やマンションが夕焼けを背景にそのシルエットを浮かびあがらせている。橋の上では欄干にもたれかけた男の子が一人川を覗きこんでいる。その後ろ姿は、「ウメちゃん元気かなあ」そんなことを言つていようように見えた。

ウメちゃん、この景色に出逢えたのもウメちゃんのおかげだよ。そんなことを思う。

18 「橋の上停留所」

alcedo

彼女が交通事故で死んだ。十年も前のことだ。

そして今度は僕が交通事故に遭つた。あつという間の出来事だった。

その瞬間、これでやつと終わったんだと、僕は思った。この色褪せた世界を抜け出して、やつと彼女に逢えるんだと、そう思つたんだ。

目を開けると、そこはまるで白黒映画のようだった。

空を覆う一面の黒い雲。眩しいぐらいに光り輝く水面。その上を走る高速度路のような大きな橋。それは遙か向こうまで、どこまでも、どこまでも続いている。聴こえてくるのは風と水の音だけ。

その橋の真ん中に僕は立っていた。

ふと見ると、橋の欄干に十六、七歳ぐらいの女の子が座っていた。白い病院着のようなものを着て、指先まである長い黒髪を風になびかせながら、凜とした瞳で僕のことをじっと見つめていた。

「ここはどこ？ 僕は死んだの？ もしかしたら、ここが天国ってやつなのかな？」

あまりにも僕の想像とはかけ離れているけど。

「ここはまだ天国じゃないわ」

女の子はゆっくりとかぶりを振った。そして、もし天国があるなら、と言葉を続けた。

「あっち」

そう言って遥か向こうを指差した。

「それがわからないってことは、貴方はまだ死んでないのね。死んでしまった人はみんなあっちに歩いていくから」

「えっと、つまり。ここがあ有名な三途の川ってこと？」

「わかりやすく言えば」

随分と近代的な三途の川なんだな、と僕は思った。

「君は誰？ 天使かなにか？」

「それはどうもありがと。でも私に羽なんか生えてないでしょ？ だから私はれっきとした人間」

「僕と同じ？」

「そう。貴方と同じ」

女の子が微笑んだ。

「私の身体は、もうずっと病院で眠っているわ。でも生きていたくもないし、かといって死にたくもなかったから、ここでちょっとひと休みしてい

たの」

女の子が右手で髪をかき上げた。細い手首にうっすらと傷痕が見えた。綺麗な傷痕だった。

「ここに座って、ここを通る人たちの話し相手になってあげたの。いろんな人の話を聞いてあげた。するとみんな私に話したいことだけ話して、勝手に一人で納得して、あっちかこっちか、どちらかを選んで歩いていくの」

「へえ」

なかには何も言わずに歩いていってしまう人もいるけれど、と女の子が言った。

「だから貴方の話も聞いてあげる。きっとそれが、私の役目なんだと思うから」

「じゃあ、一つだけ聞きたいことがあるんだけど」

「どうぞ」

「君と同じ年ぐらいの女の子がここを通っていかなかったかな？ 十年ぐらい前に、生まれたばかりの子猫と一緒に」

僕の彼女は学校から帰る途中、拾った子猫を抱えたまま事故に遭った。だから、もしかしたら子猫と一緒にここを通ったかもしれない。

「そこまで詳しくは憶えてないけど。でも子猫は通らなかつたと思う」

「……そっか」

「それにみんながみんな、すぐここを通るわけでもないみたいだし。しばらく寄り道してから来た人も、結構いたから」

「いい加減なものだな」

「意外とそんなものよ」

それで、と言って、女の子がまた僕を見つめた。

「貴方はどうするつもり？ あっちに行くの？ それともこっちに戻るの？」

今度は僕がかぶりを振った。そして女の子の隣に歩いていくと、同じように欄干に腰掛けた。答えはもう決まっている。

「もう少しここで待つことにする。彼女が寄り道に飽きて、ここを通過してくれるのを」

「変な人」

「よく言われる」

それに、僕もちょっとひと休みしたいんだ、と僕は言った。

疲れたんだ。彼女を想い続けることも、彼女を忘れようとするすることも。

生きることも死ぬことも、何もかも。

「よっぽど好きなのね。彼女のこと」

女の子が微笑んで言った。

「いいなあ。私もそんなに好きになってくれる人が傍にいたら、こんなところにはいなかったのになあ」

「そうだね」

僕も微笑んで言った。

「僕も同じだ」

それから僕たちは顔を見合わせて、もう一度笑った。

19 「しゅらうらうらば」

鍵屋染吉

浴衣なんて着るんじゃないかった。

めったにしない着付けで時間は食うし、補正のために腰に巻いたタオルのせいで息苦しいし、全然涼しくない。おまけに慣れない下駄のおかげで家を出て五分もしないうちに鼻緒ずれ。

携帯を開けば待ち合わせの時間までほとんど間がない。肝心の花火大会にはまだ余裕があるけれど、なるべくいい場所を探そうと思ったら早く行かなくちゃ。

気は進まないけど背に腹は代えられない。一瞬ためらってから裸足になる。地面の温もりの不快感よりも下駄から解放されたことにほっとした。

下駄を手を提げて足早に道路を進む。夕方ということもあって裸足でも人目をそんなに気にしなくていいし、道路が歩行者天国だから車に注意することもないし楽でいい。

ちょっと遅れるかなあ。

心配になってきたから一応伝えておこうとメール画面を開く。短く本文を打ちこんで送信ボタンを押した途端にぐい、と腕を引かれた。

「あんた、なんでこんなところにいるんだい？」

女の人の声だった。

携帯画面を見ていたために暗さに慣れない目でそちらを見ると、人影があった。女性だと思う。白っぽい着物を着ていて、それだけがぼんやりと浮かんでいるように見えた。

「なんでって……花火を見に行くんですけど」

いきなりなんなんだろう、この人。目の前の女性はあたしの腕を掴んだ

まま困惑したように、

「そういう意味じゃなくて、今日は通っちゃいけない道だのになんでこっ
ちにきたんだい」

言われる意味が分からなくて言葉が出てこないあたしを見かねてか、彼
女は周りを気にするように声を落した。

「あんた、道を一本間違えたんだよ。この橋はだめだ。早く後帰りするん
だよ」

「な、何言ってるんですか。どの道を通ろうがあたしの勝手でしょ。急い
でいるんです、通して下さい」

車ならまだしも、歩行者天国を歩いているのに止められるなんて聞いた
ことがない。

無理やり進もうとしても、腕を掴んだ手は思ったよりも力が籠っていて
簡単には振りほどけなかった。

駄目だよ、と彼女はもう一度繰り返した。

「精霊橋のこと、聞いたことがないのかい。今日だけは渡らない方がいい
んだよ」

しょうろうばし、という名前を聞いてぎょつとして顔を上げた。通行人
をよく見れば、花火見物とは思えない服装の人もたくさんいる。肌が粟立
つを感じる的同时に子供の頃に聞かされた話を思い出す。

幸橋はしょうろうばし、彼岸と此岸を結ぶ橋。花火の合図で門が閉じる。
だから花火の上がる日は渡っちゃいけないよ、帰れなくなるからね――。

毎年毎年、花火大会の日の朝になると祖母から必ず言われる決まり文句。
本当にそれを信じているわけではないけれど、いつもこの日だけは気を付
けていた。

「戻る気になったかい？」

安堵したような彼女の言葉にあたしは頷いた。

「それにしても危ないところだったよ。もうすぐ時間だからね」

独白じみた彼女の言葉に目を瞬いた。打ち上げの時間まではまだ十分余
裕があったはずだけど、それを言うと彼女は含み笑いを浮かべたようだっ
た。時間の流れ方が違うのさ、と言われれば、そんなものかと納得するし
かない。

「送ってやれるのはここまでだよ」

たもと近くまで来たところで彼女はやっとあたしの腕を解放してくれた。
何となく来た道を振り返ってみる。別に取り立てて変わったところのな
いように見えるその先が彼岸とつながっているなんて嘘みたいだ。

「次からは気をつけるんだよ。花火、楽しんでおいで」

ありがとうとあたしがいうより先にそう言って、あたしの背を突き飛ば
す。たたらを踏んで振り返った瞬間、ドンと身体に響く音。夜空に咲いた
金色の花に一時視線を奪われる。すぐに橋に視線を戻すけれど、彼女の姿
はどこにも見当たらなかった。

20 「願掛け橋」

美咲トウインクル☆

「ね、知ってる？ この橋を渡るときに、あるおまじないをすると恋が実
るって話」

放課後、四人での帰り道。橋にさしかかったところで、先に行く亜佐美

が悪戯っぽく微笑みながら言い出した。こちらを振り向いた時、長く垂らした後ろ髪尻尾と、紺色のセーラー服のスカートが十二月の北風にふわりと舞った。

恭子は女子の間で語られる噂話に、彼らがどんな反応を示すのかと内心わくわくしながら、特に期待を込めてほんの僅か先を歩く修吾の顔を見上げた。詰襟の学生服に丈の長い灰色のコートを羽織った修吾は、素通しの眼鏡の向こう側で目を細め、笑みを返してくれる。まるで全てを悟っているかのような物静かなたたずまいは、彼を他の同級生達よりも幾分、大人びて見せていた。

「おまじない？」

茜色の空の下、亜佐美と自分を交互に見やる視線に、うん、と恭子は頷く。短めの髪を梳いて左の耳を出しながら、説明する。

「好きな人の名前を唱えながら誰にも追いかされないようにこの橋を渡りきると、両思いになれるんだって」

「女は好きだよなー、占いかさそういの」

三メートルばかり先をさっさと進んでいた勇が笑った。彼だけが学生服に茶色いマフラーだけの装いで、丸刈りに近い頭を寒風に晒しながら跳ねるように歩いていた。

「あら、男だつて気にするじゃない？ 何かとジंकスとか言つてさ。思い込みつて意味では同じことだと思っけどお」

含みのある口調で亜佐美は言った。猫っぽい仕草で勇に近寄り、鞆で軽く尻を叩く。痛えな、と勇が声を荒げた。

「別に悪いとは言つてないだろ。ただそういうのを一々気にするよりも、先に行動するべきだと思うんだな、俺は」

「おお、勇つてば偉そう〜」

亜佐美の混ぜっ返しを合図に、勇は鞆を彼女に押し付けると、あつという間に橋の欄干の上に飛び乗った。他の三人が驚くのを不敵に笑つて眺めると、腰を落として声を張り上げる。

「リー、リー、リー、ヘイ、ピッチャーびびってる、ヘイヘイ、リー、リー、リー」

「ちよ、何やってんのよ!？」

数メートル下は川、落ちればただ事では済まない。まさか、と再び誰かが口にする前に、ゴォ! と掛け声をかけて勇は駆け出した。黒塗りの鉄筋の欄干の上、二十センチしか幅のないところを、平地と変わらない速度で走っていく。

「亜佐美——! 好きだぜ——!」

そして轟く勇の叫び声。ぽかんと口を開けて見送っていた三人だったが、当然一番に我に返ったのは亜佐美だった。

「ばつ、ばつ、バツカじゃないのお——!？」

鞆を二つ抱え、追いかけていく亜佐美。あつけに取られたまま、取り残される恭子と修吾。

「……すごいね」

「さすがは元・盗墨王だな。ま、あいつが将来あの調子でバカな怪我をしても、亜佐美が面倒見てくれそうだよな」

行こうぜ、と修吾は恭子を促した。

将来、という言葉が恭子の胸をよぎった。

ふと、恭子はその背中を見た。そして橋の向こうで小競り合う二人の姿も。

もうすぐ受験。終われば、卒業。

高校までずっと一緒にやってきた仲間、やがて別れ、それぞれの目標

へと歩き出す。それはもう決まっていることで、納得しなくてはいけないこと。

「ねえ、修ちゃん」

勇気を振り絞り、昔から慣れ親しんだ呼び名で、恭子は彼の名を呼んだ。

「どうした？」

穏やかに、修吾はこちらを振り向いた。

「あの、手を、つないでもいいですか」

「いいけど」

あっさりと、修吾は空いた方の手を差し出す。ごく自然な動作で、それはむしろまったく恭子を意識していないかのようで、恭子は少し不満を覚えながらもそつとその指先に触れた。

「あの……修ちゃん、ずっと黙ってたんだけど、私」

「あ、お願いがあるんだけどさ」

先に釘を刺すように、修吾が口を開いた。

「今ちよつと願をかけてるんで、俺のこと追いつかないように歩いてくれるかな？ あと少し」

そしてにっこりと微笑んだ。

「多分だけど、俺も同じこと考えてる」

21 「クリスマスプレゼント」

全試合全力投球

12月24日

クリスマスイヴの華やかで楽しい雰囲気にも包まれた商店街を、僕は1人自転車で走り抜ける。向かう先は『松永橋』。恋人のチエと待ち合わせしていた。付き合ってから初めてのクリスマスイヴ。2人の仲をグッと進展させるのに、今日より都合の良い日は無いだろう。

松永橋は亜嘉乃川の河口の近くに架かる大きな道路橋梁で、橋の両端に歩道橋が併設してある。そこから見る町の夜景は、地元出身の有名大物歌手が歌詞に引用する程、綺麗でロマンティックだった。

松永橋に着くと、歩道橋の入り口に赤いダブルコートを着たチエが立っていた。待ち合わせの時刻にはまだ少し早かったが、先を越されてしまった。僕は、自転車のカゴに入れておいた可愛らしいリボンの付いた小箱をそそくさとダウンコートのポケットにしまい込み、チエに近付いた。

「ごめん、待たせちゃった」

「ううん、そんなに待ってないよ」

そう答えるチエの頬と鼻の頭は、ほんのりと赤く染まっていた。

「いこっか」「うん」

僕の期待通り、いや、それ以上に歩道橋の上は風が強くて寒い。取り留めのない会話を交わし、夜景を眺める振りをしながら僕は、チエの手を自分のポケットに誘うタイミングを見計らっていた。チエがかじかむ手に息を吐く。そんな状況がベストだった。

「ちよつと…寒いね」

少し予想外の展開。チエが身を寄せて腕を絡めて来た。しかし、僕は柔軟な対応をしなくてはならない。今日の為に、先月から脳内シミュレーションを繰り返ししてきたのが、ここで活きた。暖めるように…両手でチエの手を取り…クリスマスプレゼントが入ったポケットへと…手を誘う…。そう…左手は添えるだけ…。

「…まーくんさあ、今週の日曜日。何してた？」

「…うえ？」

チエの意外な言葉を受けて、思わず声が裏返った。

「何…してたん？」

チエの声が震えているのは、寒さのせいだけじゃないようだった。

今週の日曜日。僕は、チエのクリスマスプレゼントを買う為、クラスメイトの高橋さんに付き合ってもらって、街に買い物に出掛けた。女の子へのプレゼントを選ぶなら、やはり女の子の意見を聞くのが重要だと思った

からだ。

「なあ…どこに行つたか聞いてんすよ？」

チエに絡め取られた右腕に痛みが走った。肘の関節を極められている。チエの北風よりも冷たい視線が「質問は既に『拷問』に変わっているんだぜ」と語っていた。しかし、ドラマティックな演出でプレゼントを渡すまでは…。

「ヨシミって知ってるよね。私と同じクラスのヨシミ。そのヨシミがさあ、日曜日にさあ」

「痛いっ！…です」

「東ジュスコで、まーくんを見たって言うんだよね。女の子と買い物してるまーくんを。なあ、どう思うよ」

「見間違いないですか？」

「…ですよねえ。私もそう思って、取り敢えず塞いどいたわ」

「え？塞ぐって？」

「五月蠅いヨシミの口をね、ホツチキスで。バチーンバチーンで」

声にならない悲鳴が喉の奥から湧いて出た。俺の身体の震えも、寒さのせいだけじゃないようだった。

「震えてる。寒いのか？まーくん？」

「ダイジョブ。ダイジョブ」

いつの間にか、チエの腕が僕の背後から腰を捕らえていた。

「正直に話せ、な？」

「ち、違うんだよ！！」

「言い訳か…？おめえ、私を舐めてんのか？…：…なあ、舐めてるから…：そんな上等かませるんだよな？な？」

「チエ！話を聞いてくれ…：下さい！」

「もおいしい。もお喋るな。舌噛むぞ」

「ひいひい！」

必死にチエのクラッチを切ろうともがくが、万力のような締め上げに堪え切れず、次第に僕の抵抗はささやかな物になる。足が宙に浮き、世界が凄まじい速度で反転した。

町の夜景が照らす歩道橋の上。2つの影が寄り添い、アーチを描く姿は、さぞかし美し…：…。

完

22 「橋の上」

大橋千住

幼い頃、大きな橋は楽しい場所だと思っていた。笑顔で向こうからやって来る人もいれば、見送られ振り返りつつ去っていく人もいる。橋の上の様子を眺めていて、飽きることはなかった。でも、ばあやは私に何度もこう言った。

「橋を渡った向こうはこことは違う世。絶対にひとりで橋を渡ってはいけません」

そう、約束を守れば怖いことはない。

私は日本橋の海産物問屋の娘として生まれた。でも、私は日本橋に、父の店に行ったことがない。父の叔父の店があるこの千住で育った。千住は隅田川沿いの交通の便の良い賑やかな宿場町。でも、夜は寂しい。私は父のいる日本橋は夜でも賑やかなのだろうかと思っただけのものだ。

九つの時、おじさんが夜の寄り合いに息子である一太郎さんと私を連れて行ったことがあった。ばあやはいいい顔をしなかったが、私は夜の橋が見られるかもと楽しみにしていた。

一太郎さんは私よりみつつ年上。そろそろ日本橋の店で修行するという話が出ていた。

大橋近くの料亭に入ると、一太郎さんと私は料亭の夜の庭で遊び始めた。満月に近い月夜で目が慣れてくれば、白い物は光の反射でぼんやりと浮かび上がって見える。

「ちかちゃん、こっち」

一太郎さんが私を呼ぶ。

垣根の隙間から大橋が見え、小さな蕎麦屋の屋台が出ていて、数人の男の人が立っているのが見えた。旅人という風ではない。

「お蕎麦を食べに来てるの？」

私が囁くと一太郎さんは答えた。

「違うよ」

私の手を引いて垣根の出入り口に近づく周囲を見回し、誰もいないのを確かめ外へ出た。私はびっくりしたが、橋の上からの景色が見られると思うと黙って手を握られたままついていった。

一太郎さんは大橋のたもとまで走ると欄干にくっつくようにして座り込み、私に囁いた。

「見える？ あの女達」

屋台から少し離れたところに女の人は何人かいた。歩いているわけでもなく、ただ立っていて、手に大きな筒のような物を持っている。

「夜鷹だよ」

「よたか？」

聞き返す私に一太郎さんは無言で手を強く握ってきた。その時、橋の下を見た私は驚いて息を呑んだ。

月の光の中に白い足が光っていたのだ。

白い足をあらわにして横たわる女の上に男が覆いかぶさっている。私は女が殺されているのだと怖くなつて一太郎さんにしがみついた。

その時、女の白目が月光にきらりと光った。

私達に気がついたのだ。女は私を見て微笑んだ。きれいだと思ったが、何が起きているのかわからず怖くもあり、戻ろうという気持ちをこめて一太郎さんの手を引いた。

一太郎さんも私が見たものを見つめていた。まるで魂を抜かれたかのよう。

「帰ろう」

私は再び、一太郎さんの手を引く張った。一太郎さんははっと我に返ると、泣きそうな表情の私を見た。

料亭の庭に戻ってもこわばった表情の私に一太郎さんが言った。

「ちかちゃん、大丈夫？」

私は頷いたけれど、なかなか顔のこわばりは消えない。

「見たものがなんだか、わかる？」

「わからない……」私は小さな声で答えた。

「夜鷹が客を取っていたんだよ」

「客をとる？」

「そういう仕事もあるんだよ。女には」

それからすぐ、一太郎さんは日本橋へ行った。

数年後、私は自分が日本橋にいられぬ理由を知った。私は父が吉原の女に産ませた娘。吉原は男が女を買う色街。言葉でしか知らない街。

月の光の中、男に覆いかぶされつつ艶然と微笑む白い肌の女が脳裏に浮かんだ。

私には橋の下の女の血が流れている。母は橋の下に、そして、私は橋の上にいる。母よりは幸せなのだろう。しかし、女である限り、ひとりで大橋を渡ることはできない。

今日、私は千住の店に戻って来た一太郎さんに嫁ぐ。私のような素性の娘にしては幸せなことと言えるのか。

しかし、月の光の中、橋の下の人と男を、魂を抜かれたように橋の上から見つめていた一太郎さんを思うと、運命からはやはり逃れられないものだとも思うのだ。

23 「糸赤橋」

背筋シヤキ太郎

道路はゆらゆら、ウシのうんちみたいにへびがくっついてる。ゆらゆらの近くは暑くって、セミたちが「やーいやーい」言ってます。

こんな日に飲むラムネはおいしいです。今日は駄菓子屋ウメ屋のウメばっちゃんに貰ったので特別おいしい。ノドのしゅわしゅわがいつもよりしゅ

わしゅわしてる。ウメばっちゃんありがとさんきゅー。今ならお父さんが生ビールを飲んだとき『のどごしが良いんだよ』と言ったのが解る気がします。

ラムネがタダなのはトワが村からお引越すからです。なので今日のおこづかいには赤くおおきな指輪を買いました。でもぶかぶかなのでずつと手はグーなのです。

ウメ屋の前には橋があります。赤くないのに赤の色が入った糸赤橋（イトアカバシ）という鉄の橋です。

トワはウメ屋の前にあるベンチに座り、糸赤橋を見えています。橋のむこうに住むとー君がやって来るからです。とー君家のお庭ではおつきくてコワイ犬がワンワン吠えるから、ウメ屋で待っているのです。時間ないんだけど、とー君はまだやって来ません。しょうがないので雲を見ながら待つことにします。

ウメばっちゃんも糸赤橋を見えています。“戦争の人”を忘れないように、店の奥で口を開けてぼんやり見ているのです。

「ねえばっちゃん」

「なんだい？」

「糸赤橋で愛を誓えば結ばれるんだよね」

「そだ」

空で真っ白いキリンが首を曲げてじいっと見下ろしている。木ではセミたちが「やーいやーい」言ってます。

「遠く離れてもな、空の上の人になってもな、糸赤橋で愛を誓ってれば見えない糸で繋がってられる。昔、身分違いの男女が愛を誓って糸赤橋から身を投げたように。女が死ねずに生き残ったとしても、想い続けてい

れば愛した男の記憶を持つ子を産んで愛すことだっただけだ。想い続けていけば見えない糸は互いを強く引き付けて再び会えるのさ。だから決して忘れちゃいけないよ」

「やっぱすげー」

キリンからサカナの群れになったころ、ようやくとー君の走る姿が橋に現れました。手には白い紙を持ってます。

手を振って立ち上がると「ラムネ持ってけ」とウメばっちゃんが言うので、自分の飲み干し、新しいラムネを汗ばんだ指輪をはめた手で取って橋へと向かいました。

「とーくうん！」

とー君は風の子。いつも走り回り、トワはその後ろをついていく。とー君と一緒にいるとワクワクやドキドキでいっぱい。足は早くって、ソリで滑るのは達人で、絵はうまくいとー君と居る、それだけで何でか楽しくって毎日毎日同じことをしても飽きないのです。

「ごめんね。ちよつと絵を描いてたんだ」
大好きなことに集中すると時間を忘れるとー君。それも良いところのひとつ。

はい、と画用紙を渡したとー君は手を後ろで組み、白いキリンみたいに首を曲げて下を向きました。

色えんぴつの絵はウメ屋の前をふたりが走ってる絵でした。とー君の後ろを笑顔のトワが走ってます。

「ありがとーねえ、とー君」

うん？ と下を向いたままとー君は言いました。

「大好き。お引越してもずっとずっと」

うん、ととー君は言い、トワはとー君に一步近づきました。

「忘れない？」

うん、と下を向いたままのとー君。もう一度だけ近づきました。

「ねえとー君」

なあに？ と顔を上げたとー君はびっくり顔をしました。

もうちよつとだけ近づいた、体ではなく顔を。

はじめて触れたくちびるは熱くって、やわらかくって、ちよつぱりラムネの味がしました。

「ずっと忘れないからね。じゃあね」

そう言っくとー君に背中を向けて走りました。十歩くらい進んだところで渡すはずのラムネに気がつきました。

振り返って「ウメばっちゃんが飲めって！」とラムネを投げたとき、ぶかぶかな指輪が抜けそうになりました。

「あいらぶゆー！！ この赤い指輪がびったりはまるころ、また会おうねっ！」

24 「約束」

昨日の友は今日の敵。

店の設えは昭和三十年代の民家。引戸の建て付けはキシキシと音のしそうな風体だ。

意外とスムーズに開いたことに軽く驚いた。

ペンダントライトのぼんやりとした乳白色の光は、天井まで並ぶ本を柔らかに照らしている。

玉石混合とでもいうような品揃え。古いも新しいもごっちゃ。でも店主の頭の中を覗いている気分になるセレクト。

クラシカルなジャズが流れ、珈琲の苦み走った香りが漂ってきそうな趣がある。まるでレトロなカフェのようだ。

カウンターで初老の男性が「今晚は」と一言声をかけて、また手元の本に目を落す。

時間がそこだけ緩やかになったような、そんな空間。

唯はほっと肩から力を抜いた。目に付いたタイトルに手を伸ばす。少し離れて、やはり同じように透哉が日に焼けた古書のページを捲っている。

その顔に徒労感が滲んでいて、慌てて目を伏せた。

見てはいけないものを見た気がして。

『回数だよ。何度でも通うから』

実家の門前で努めて明るく言い切ったが、気にしていないはずがない。

一緒になると決めて折角挨拶をしに来てくれたのに、話すら聞いてもらえないのではどうやって為人を知ってもらうのか。

親の頭の古さは、中に張った蜘蛛の巣の数までも知っているつもりだった。けれどまさかここまでとは。名前もないイラストレーターでは娘はやれないということか。実際は出版社勤めの自分が彼の担当になり、惚れ込んで押しかけた方なのに。

選んだ人を拒否されるのは、自分を否定されるのとどれほどの違いがあるのだろうか。

二人暮らすアパートまでの帰り道、夕闇に沈む川沿いをとぼとぼと歩い

た。勢い良く宣言した割に透哉は全く口をきかない。

そもそも彼の方から逢いたいだの好きだの言われたことがあったろうか。道沿い佇むこの店に引き寄せられたのは、きつとふたりきりに堪えられなかったからだ。

ふと、積み上がる本の塔の前で暫く視線を彷徨わせていた透哉の動きが、止まった。

瞠目したまま固まった面、震える指先で背表紙に伸ばす。

宝物を扱うように手にして表紙を確かめた途端、顔が綻ぶ。

やつと巡り会えたとばかりの表情。それが唯の好奇心を誘った。

「何？ 面白いものでも見つけたの？」

絵本、だ。

けれどその絵の見事さに、すぐ得心する。

とても独特な色使いだった。

蒼く暗いキャンバス。満天の星が白い軌跡を描く。箔押しされた文字には『TANABATA』とあった。美しい粒子に満ちた流線型の帯。

両岸に着物を着た女性と男性が、川で隔てられて立っている。

白のハイライトが絶妙で、こぼれだすような光が虹色に降り注いでいるようだった。

水彩にしては色が重ね込まれており、繊細で水っぽくない。圧倒的な色彩に透哉の絵を思い出した。違うのだが似ていた。迫りくるほどの色の洪水が。

ほおっと息をつく。

「英語版の七夕？」

「ああ。子どもの時にこの本に出会って、それで絵を描きたいと思うようになったんだ」

気付けば肩が触れ合うほどの近くに互いの顔があった。視線が絡む。どちらからともなくはにかんだように微笑んだ。

「年に一度しか逢えないその日に雨が降るなんて、ヤダよな」

ぼつりと想いが転がった。

「そんなこと考えてたの？」

「うん、似てるって思ってた」

それには答えず戯れのような質問で返して、言葉の持つ痛みが付かないフリをする。

「透哉だったらどうする？」

けれど相手は真剣に思考して、やっと自分の覚悟を露わにした。

「俺ならそんな一年など待たず、その川を渡る手段を講じるよ。それこそ船でも飛行機でも。待つなんて性に合わない。」

「何よそれ」

「橋をかけるよ。だからその上で逢おう。ホントだよ？」

「馬鹿ね、子どもみたい」

思わず憎まれ口で切り替えしながら、唯は熱くなる目尻にぐっと力を込めた。慌ててカバンに視線を落とし、財布を出そうとする。

透哉はそれを制して本を引取ると、そつとレジに向かっていた。

25 「英雄の話」

アルファルファ作戦

国はこの上なく平和だった。経済は豊かで、国民の思想はすこぶる健全、誰もが穏やかに生きていた。

ある暖かい冬の昼下がり、Aという男が決起した。何に決起したのか誰にもわからなかったが、とにかく変わったことをやるというので、そこに数人集まり、やがて数十、数百と増えていった。巨大になったAのグループは残った国民を脅かし、すべて力で奪うようになった。これを憂いBという若者が立った。Bは同じ志をもった人々に呼びかけ、Aに対決すべく統制をとった。

二つの軍団は戦った。いずれBが優勢になり、あわや国外逃亡というところの栈橋でAを追い詰めるに至った。Aは拳銃の弾は撃ち尽くしてしまっていたので、一対一ではあったが、勝負にならない。Bは程よいところで追いかけてこをやめて、弾丸のたつぷり入った銃をむける。「これで平和がもどるんだな」と感慨ぶかげに呟くと、すっかり満足して、最後に敗北者の話でも聞いてやるかという気になった。

「おれは、本当はお前のようになりたかったんだ」

「何を言うかと思えば……この期におよんで馬鹿なことを。やってることが正反対じゃないか。ばからしい。おべんちやらはやめたまえ」

「お前は英雄だ。そう国民に迎えられるんだ。なぜ英雄になれたかわかるか？」

「それは私が、健全だからだ。悪は滅びるべしという信念に従って、勝つ

たからだ。そして平和のため、即ち国民のため……」

「自分のため」

「ほう、なるほど、まずそう来ると思っていたよ。しかし、まあ、なんだ、君もあんまり芸がないことを言うものだ。私も国民の一人なのだから、当然私のためでもある。なんか不都合があるかね？」

「いや、そんなのではない。おれは君になりたかったから、セリフを引き継いでみたに過ぎないのさ。むろん、まったく、そのとおり。悪いことなんかなんにもありやしない。万々歳。おれがいうのはそのことじゃないんだ」「だったらなんだっていうんだい」

「お前が英雄になれるのは、おれのおかげなんだよ」

「ふん……何かと思えば負け惜しみか。まあいい、聞こうじゃないか。続け給え」

「お前たちは、おれたちの誰かに家族や友人を殺されたり、恋人を犯されたり、金や物を巻きあげられたりした者たちで構成されている」

「うむ、復讐に燃えている。その無念が今、私という英雄によって晴らせるのだ」

「しかし、お前は違う」

「違わないよ。英雄だ」

「違う、いや、そのことじゃなくて……お前には友達も恋人もなかったということさ。そのうえ金もなかった、仕事すらなかった。お前にはことを起こす動機がなかった……要するに、おれが出てきたところに、お前はたまたま乗ってきただけなのだ」

「なるほどご高説だ。名推理だ。まったく素晴らしい。たしかにそうかも知れぬ。お前さんがいなければ、私は今もただ一介のニートであったかも知れぬ。しかし今はご存じ英雄だ。それはいいが、結局、お前さんが

私になりたかったというのは、どういうわけなんだい」

「おれがやりたかったのは、英雄になることだ。誓っているが、おれ自身は一人も殺しやしないんだ。英雄が出てくるために絶対必要なのは、今のおれのような存在なのだ。英雄だけでなんて出てくるわけがない……みんな平和に首までどっぷりつかっていたんだからな。だから、おれがやってみせるしかなかったというわけなのさ。おれは目的を見失っちゃいない。ただ、それが自分ではなかったというだけで……ばからしい？　ばかを言っちゃいけない。そのばからしさのおかげで、お前は英雄になれたんだ。おれは自分でまわって仲間を集めた。その点お前はどうか、何にもわかっちゃいけないにぎやあぎやあ騒いで、人がそこに勝手に集まってきただけだろう。お前自身は能無しなんだ。目的を達成したら、英雄家業もお仕舞いだぞ。それからどうするか決まっているのかい？　ここでおれを見逃がしておくほうが、賢明じゃないのかね」

26 「15歳からの恋文」

猫まんま

無垢な、白い手紙が郵便受けの中にはいつていた。

宛名には恵美へと書かれただけで、切手は貼られず、住所も書かれていない。

直接郵便受けにいれられたものである。

恵美は一瞬警戒したが、手紙を裏がえしてするりと緊張がほどけた。

明と掠れた字で幼なじみの名前が書かれている。

恵美は手紙を抱えて、急いで自室の二階のアパートにかけこんだ。

部屋にはいると、恵美は乱れる呼吸を整えながら手紙をあけようとした。

指先がこまかく震えて、綺麗に封筒がやぶけない。

焦れた恵美は大振りのキッチンバサミで封をきる。

『拝啓 杉本恵美様』

堅苦しい挨拶文句。いつもの明からは、恵美は想像できなかった。隣に住んでいた幼なじみは、尖った美貌を持ち、いつも尊大で、自己中心であった。小さな町の名主の長男という立場が、明の我が儘な助長させたのだろう。

寂れはじめていた町は、幼い者が少なく同じ歳で、偶然同じ月に生まれた恵美は遊び相手としてよく駆り出された。

我が儘な幼なじみ。恵美の明に対する思いはそれ以上も、それ以下でもなかった。

あの事が起こるまでは。

それは15歳の夏だった。

下校中、恵美は隣町と自分の町をつなぐ橋の上を歩いていた。白くペンキで塗られた、この町にしてはモダンで洒落ている橋を恵美は気に入って

た。

「恵美！」

制服の白い半袖をなびかせ、明が追ってくる。

恵美は紺のプリーツスカートをゆらし、振り返る。

「なに？ どうし…」

恵美は、全ての言葉を発することができなかった。

明の唇に、塞がれて。恵美は、目を見開いた。かさついた自分の唇とおもったより、やわらかい明の唇に、戸惑い、体の芯が鈍く揺れた。

が、次の瞬間我にかえり、恵美は明の頬を叩いていた。

あかく、あかく腫れた頬は一週間腫れがひかず、明はお手伝いさんや、両親に問い詰められたが、誰にされたかはついに答えなかった。

恵美は、罰があたったんだと思った。ほんとはずっと前から明の、自分に対する視線に気付いていた。ふざけてじゃれあうときに、ふと見せる、欲するような明の目。他の男子と話をしたとき、牽制するかのよういつものきつい目をさらに鋭くさせていた。

恵美は、18の春、その視線から逃げるように上京した。

明は、町をでなかった。

それから5年の月日が過ぎがたち、今日初めて明から手紙がきたのであった。

『多分、恵美に手紙を書くのは初めてかもしれませんが。いつも、顔を合わせていたせいか、なんとなく何もいわなくても伝わるものだと思っていました。そんなことは幻想でしかなかったと、15の夏に思い知りましたが。恵美、元気にしてますか？ 俺は正直元気じゃない。』

恵美に会いたい。
昨日、親戚の集まりで東京に出てきた。恵美のおふくろさんにここを教え
てもらって、きたんだ。

俺は明日までこの町にいる。

恵美、俺と会ってくれないだろうか。昨日町の外れで白い、小さな橋を見
つけた。

その橋の上で待っている。伝えたい、ことがあるんだ。待ってます。明』

手紙は、いつもの明からは想像できないくらい饒舌であった。

恵美は手紙を読み終わると、急いで脱いだ靴をはき直した。

行かなければ橋へ。明も伝えたいことがあるように、恵美にも伝えたいこ
とがあった。橋の上で芽生えて、時を止めたままの想いを。

手紙を握りしめ、恵美は駆ける。

白い手紙を、旗のように揺らしながら。

27 「首都高湾岸線」

古賀き子

アスファルトから陽炎が立ちのぼる。

海風も熱気を振り払うには弱すぎる。

海を跨ぎ、陸と陸を繋ぐ、二層になった吊り橋。

その上に、幾台もの自動車が停められている。エンジンは静まり返り、
運転席に主はない。整然と並ぶ様子は、彫刻作品にも似ていた。

その傍ら。

杖をついた男が、独り歩く。

白髪頭で、顔に深い皺といくつものシミがある。ふらつきこそないが、
足取りは重く鈍い。

男は歩みを止めた。

大型トラックの後ろに出来た影の中に、腰を下ろす。

「はあ……」

背負った小さいリュックを下ろし、薄めた海水の入ったペットボトルを
取り出す。ラベルはなく、外側は細かい傷で濁っており、縮みかけている。

男はペットボトルの中に入った水を口に含み、ゆっくりと飲み込む。

四口ほど飲んでから、空を仰ぎ見る。

濃い青空に、夏特有のうずたかい雲。その下には、海と、街並みが広が
る。

海に面した埋め立てて整備された地域には、特に高いビルがそびえ立っ
ている。その周囲には公園や遊園地、商業施設がある。海には何隻もの商

船が浮かんでいる。

しかし、ビルのコンクリートはくすみ窓は汚れ、遊園地のジェットコー
スターも観覧車も微動だにしない。船は時折波に揺れるだけで、進む事も

戻る事もない。

廃墟ではない。処々から、炊事の煙が立ち上り、人の姿もある。だが、
街の設備は、すっかり眠っていた。

「——ひよつとするとあれは、第三次世界大戦だったのかも、知れないな」
男は呟いてゆっくりと立ち上がり、また歩き始めた。

進んでは休み、休んでは進む。
流れ落ちる汗はシャツを浸す。

気まぐれに強まる海風は、汗を乾かし、一瞬の清涼を与えてくれるが、同時に足をよろめかせる。男は転ぶまいと杖にしがみつき、必死に踏ん張り、耐える。
風に煽られながら防護柵まで近づき、掴まる。

「熱っ」

太陽に炙られた防護柵に、思わず手を引つ込める。

男は手をすり切れたタオルで巻き、再び防護柵を掴む。

風に髪をかき乱されながら、再び先へ歩き出す。

男の視線は、橋のその先に向いている。橋の終わった先には、もう一つ橋と対岸の街並みがある。

より落ちている歩く早さ、ペットボトルに残った水の量、表情に色濃く表れた疲労、汗でびったりと身体に貼り付いたシャツ、荒い息。

どれもが、もうこれ以上進み、橋を渡り切る事が無謀だと表している。休めばもう動けない、座ればもう立てない、転べば決して起き上がれない。

男は足を踏み出す。

次の一歩が出なければ半歩、半歩が出なければその半分。
踏み出し続ける。

そうやってずっと、歩いて来た。

しかしその足は、ついに前に出なくなり。

そして、よろめいた。

「っと」

転びかけた男を支えたのは、男と同じくらいの歳の白いヒゲを生やした男だった。

男とは逆方向から歩いて来た、友だった。

男は微笑んでその場に座り込むと、リュックを開け、一冊の本を取り出す。

「本、これか？」

友は本を受け取り、表紙を見る。

有り触れた、ベストセラー小説だった。

「ああ」

僅かに友は微笑み、ページをめくる。

「メール、届いてたのか」

「メールを読んでいる途中に、大消失になってな」

「君の方じゃ、そう呼んでるのか」

「ほう？」

「こちらでは情報テロという人が多いな」

「テロなのか事故なのか」

リュックの口を閉じ、男は肩をすくめる。

「全てのコンピュータのデータが消えたってだけで、どうして車まで動かなくなるんだか」

「人もボケれば役立たず扱いだろう？」

友は、自分と男の頭を指さす。

「違うない」

ひとしきり笑った後。

「——いつ返す？」

友が尋ねる。

「二〇日もあれば、飽きるぐらい読み返せるだろ？」

「だね」

二人はゆっくり立ち上がり、互いが来た方へと戻って行く。

陽炎に姿が歪み、見えなくなる頃、男と友は振り向かぬまま、軽く片手を振った。

吹き抜ける海風に、僅かに夕暮れの涼しさが混じり始めていた。

28 「You who sinks in red」

霧ヶ峰雲

橋の上から見る景色は恐ろしくくらいに美しく、何だか無性に泣きたくなかった。

沈む夕日に染まった浮き雲や空を反射させた紅の水面は、静かに揺れている。

「何を見ているのかしら？泣きそうな顔をして、男のくせに情けないわ」

橋の手摺の上に立つ制服姿の少女。幼馴染みの、夏弥兔だ。橋の下から吹く風でスカートが巻き上がっているが、本人に気にした様子はない。

「降りろよ、危ないだろ。落ちたら冗談で済む高さじゃないぞ」

「そんなに鈍臭くないわよ。あたしを誰だと思ってるの？夏弥兔様よ」昔からこうだ。女王様気取りでプライドと自信は人の何倍もある。その性格のせいで、兔には俺以外の友達はいない。

俺がいくら言っても兔は手摺から降りようとはしなかった。だが、足を橋の向こう側に出して俺に背を向けて腰を下ろす。兔は足をぶらぶらさせながら俺に話し掛けてきた。

「どうせあんたは、夕日が血みたいだって思ってたんでしょ」

そう言っただけは、わざとらしく溜め息を吐いてさらに言葉を続ける。

「あんたは何も分かっていないわ。この程度、精々トマトジュースじゃない。本物の血って見たことあるの？」

「それくらいあるさ」

「馬鹿みたいに優しいから、夕日が血に見えるのよ。あんたのそういう甘いとこ、あたしは大嫌い」

そう言っただけで俺の方に首だけ向けた。俺と兔の視線は絡み合い、反らすことができない。兔の瞳は強い光を宿し、何かを決意したようだった。

「でも、あんたの事は好きよ。世界で一番愛してるわ」

紡がれた言葉は震え、絞り出したようだ俺は思った。前に同じ言葉を発したことがあったが、重みが違う。

だけでも俺は、そう思っただけでも前と同じように軽く薄い返事しか返さなかった。

「…前も言っただろ。俺らはただの幼馴染みだ」

「付き合ってくれないなら、あたし、ここから飛ぶわ」

立ち上がった兔は俺を見ることもなく、川に向かっていった。その背はいつもより小さく見えて、俺が引き止めるのを待っているようだった。

死んでもらっても困る。俺は了承の返事をしようとした。だがその言葉を

言う前に、兎が口を開く。

「あんたは優しいから、きつとあたしを好きでなくても付き合ってくれらわ。頼めば愛だつて囁いてくれる。でも、そんな優しさは残酷よ」

兎の表情は俺から見る事ができない。だから俺は震える肩や声で、兎はもしかしたら泣いているのかもしれないと思った。

「あたしには友達も親もない。あたしの世界はあんただけだった。そんなあんたに受け入れてもらえないのは、とても辛いわ。……ねえ、知ってる？ 兎はね、寂しいと死んじゃうのよ」

そう言った兎は、次の瞬間には俺の前から消えていた。

橋の上から見る景色は先程よりも濃い紅に見えた。とても恐ろしい位に。その紅が、俺にはやっぱり、血に見える。

「あなたは、残酷な人」

兎の呟きが聞こえた気がした。

29 「石橋で戦って渡れ!!」

木古里博士

「ぶっ、たまげ！」

会社の忘年会の帰り道。

加賀利睦美(二五歳)。同人作家は、橋の真ん中で腕を組んで仁王立ちしている男を見て驚愕。その男は、隆々とした筋肉の持ち主。根のような太い腕に、幹のような太い脚。そして、ブロンド碧眼。

「お嬢さん、才帰リカ？」

男が話し掛けてきた。

「どうやら外国の人。」

「あの……、どこの方でしょうか？」

「オオ！ ソーリー。私ハ、すこつとらんど人ネ。だみあん言イマス」

ああ、なるほど。スコットランドの勇者つてキルト姿だったわねと納得した直後、睦美の体を危機感が駆け巡った！

「ええー！ ちょっとタンマ。スコットランドの勇者つて、まさか……！」

「ヴェインゴー！ のーぱんネー！ ソシテ、お嬢さんト同ジすかーとデス」

「ち、違うわ。私のはプリーツ」

「ハッハーツ。イツツ、シャイ、ガール！ 私トちえつく仲間ネ。お嬢さんモ勇敢ナぐらつぷらーヨ」

「あああなたと一緒にしないでよつ。フルチン野郎っ！」

鶏冠にきたぜ。

だが、この寒さの中でキルト姿一枚とは！ ちなみに二人とも赤のチェック柄のミニ。

「サア、今カラ世間ノ荒波ニ打チ勝ツ戦イヲ始メマス」

しかもダミアンは、睦美をこちらの世界へと招き入れようとしている。

「すかーとヒラリ、翻シー！」

後方へ踵を振り上げた。

「すかーとヒラリ、翻シー！」

足が天高く突きあがる。

「すかーとヒラリ、翻シー！」

踏み込んで踵を突き出した。

「すかーとヒラリ、翻シー！」
鞭のようなハイキック。

月明かりに照らされて、青白く輝きながら散ってゆくダミアンの汗。汗。汗。汗。

—ええーッ。ちよっとー、ドキドキするのは何故ー？—

ミニキルトで蹴りを繰り返してゆくダミアンに、睦美は熱くなった頬を両手で押さえて見入っていた。

その時！

数々の水飛沫をあげて、石橋のに着地した者たちがダミアンを取り囲んだ。

「ダミアンとやら、グラップラーとは河童の三瓶様こと、この俺だぜ」

そう名乗りをあげて、長身でスレンダーな男が前に出てきた。

「いやんっ」

睦美、河童の三瓶に一目惚れ。

三瓶がダツシュ。

鬨いに、ゴングは要らぬ。

「三瓶スマッシュっ！！」

ジャンプ、空中旋回。

「すかーとヒラリ、翻シー！」

ダミアンジャンプ。

そして、星の瞬く夜空で交差する飛び蹴り。満月を背に、漢(男)二人の

影が重なった。火花を散らして擦れ違い、着地。お互い片膝を突いていたが、三瓶の方に変化があった。

三瓶が顔をしかめて左胸を押さえたそこには、痣が。

「フッフッフ……。手応え有りネ」

ゆっくりと立ち上がったダミアンは、腕を組んで笑みをこぼした。

その瞬間。

男のミニキルトが避けて、ハラリと石橋の上に落ちたのだ。

「イヤンッ！ マイツチング！」

忽ち顔を赤くしたダミアンは、反射的に脚の間に手をやって隠した。

「つてか、何で胸も隠してんのよっ！？」

歯を剥き出した睦美から、突っ込みが入る。

「ダミアンの旦那。勇者の証しが無きや戦えまい」

「オーウ。ソレ以前二、公然猥褻罪ネ」

「ふ……。お前さん、この三瓶様に初めて傷負わせたんだ。終わらずにや

勿体ねえ」

「イエス。私ノきるとヲ破イタノモ、貴方ガ初メテネー」

言葉を交わしていく内に、二人の漢(男)はお互いの顔を見つめ合っていたのだ。数秒に渡るアイ・コンタクトのうちに、二人は熱い握手を交わして微笑んでいたのである！

そして漢(男)二人は、再びこの場で戦うことを共に誓い合った。

やがて、その一部始終を見ていた河童たちの瞳から感動の滴が頬を伝い、熱い拍手が沸き起こっていった。

ブラボー！

ブラボー。
 南瓜と代え難い素晴らしいモノを、見せていただいた我々は幸せ者だ。
 ブラボー、三瓶。
 ブラボー、ダミアン。
 この晩、河童たちの熱き祝福は、いつまでも続いたという。

めでたし めでたし

そして、ここから先の男二人の展開を妄想してドキドキしていた睦美は、自宅に帰ったあとで同人のネタにしたそう。

30 「王の子、橋番の子」

コロッケごえんのすけ

昨晩までの嵐で水かさが増して、あれあのように渦巻いて盛り上がる流れが夜目にもくつきりと見て取れます。馬に脇見をさせぬようお気をつけなさいませ。この橋さえ渡れば街道まで直にございますよ。

王様がこの橋をお渡りになったときは勿論こんなふうではありませんでした。真昼のことで、ぶどう畑やどんぐりの森が秋の豊かな実りを示す黄金

色に輝いていたのだそうです。
 川の流れもさらさらと祝い歌を歌うようだったと言います。ご存じですわね、その日がこの国のはじまりの日として、絵や歌やお芝居になっているほどですもの。

いよいよ橋を渡ってご入城されようかというそのとき、鳥の影のように素早く御前にひれ伏したのが橋番の男でした。

拙者はしがたない橋番にございますが、少々の魔術を用いまして先のことが見通せ申します。畏れながらこの橋をお行きになれば御身にご難の降りかかるのは避けられませぬ、どうか一度戻られて日をお改めいただきとうございます。

申し出を王様が聞き入れる筈ありませんわね、獅子のごとき勇猛さを謳われた方でございます。

面白い！ 今日より天下を統べようというこの秋に、災難とやらが起こって入城を妨げるなら余の命運もそれまでと諦めよう。
 とて、剣を抜き放ち父祖の名に祈りを捧げたのちに意気揚々とお進みになられたのです。そうこの橋を私たちと逆の向きにでございます。

橋の中ほどに差し掛かった所で王様は野盗に出会われました。従者のなかに裏切り者が潜んでいたのです。狭いこの橋で前は敵、後ろに裏切りの徒、王様の身が卑怯者共の手に落ちるかというそのとき、橋番の男が再びひらりと現れ……その身を呈して王様をお守りいたしました。

王様が守られながら橋を渡りきったとき、橋番の背には無数の矢が突き刺

さつておりました。王様は亡骸の前に跪いてご自分の不明を詫び、進んで弔いの儀式をなされたと言いますが、そのような勿体のない。

そうして身寄りのなくなった橋番の娘を王様はお城へ連れ帰って親類の子女のように丁寧で育て、これが長じてのちは王子様の侍従というだけいじなお役目をくださいました。本当に、勿体のないことにごさいます。

何が勿体ないかと言って、橋番は自分の心の望むままに生きて死んだのだからそれだけで満ち足りて幸福だったに相違ありません。奴らのはかりごとを自分の身ひとつで出し抜いてやろうと、ほとんどわくわくして軽い足取りで御前に現れたのでしょうか。

王様の治める新しい世の中に、きっと心底からの望みをかけていたのでございませぬ。

けれども、ああ、世の中が本当に治まるということが果たしてございませぬ。この世に小ずるい者や卑怯な者の絶える日など来るものでしょうか？ おろかな端女の身には、とても……。お許しくございませぬ。

姉やお守りくださるといふ、そのお言葉だけでこの魂は救われましょう。あれあのように松明が迫ってきます。お逃げなさいませ。馬が倒れるまでお進みくださいませ。後生でございませぬ。姉やはこの橋から先へはゆけません。

31 「はねのはえたさかな」

眠れる獅子座流星群

「空に照らすものの無い夜を漂う白い半円が、この橋に続く一つ限りの道です」

月に照らされた病室で、勢太の父は読みあげ終えた絵本をたたんだ。背表紙に「はねのはえたさかな」と書かれていた。

幼い勢太は尋ねた。

「おさかなさんは、はねをはやしてもらったのに、どうしておそらをとばなかったの？」

絵本をベッドの脇に置き、父は首を捻った。

「どうしてだろうな？」

きまり悪そうに顎の下を掻こうとした手が、先に腿にはたきつけられる。

工場勤めの時に、粉塵を手から振り落していた名残だった。

肺に溜まった粉塵が、男の残り少ない命を削っていた。

「そのはしにいつて、おさかなさんにきいてみたいなあ」

「そうだな」

それが、勢太が父と交わした最後のまともな会話であった。

取りつかれたように「暦気楼の月」について調べ始めた父は1年後、うわ言を残して勢太の目の前で川へ飛んだ。

「父さんは橋へ行ってみる。追うな」

勢太は覚えている。

確かにその時、父の消えた川面には鋭く凍てついた半月が残されていた。

その橋はビルがそびえ立つ大通りと平屋が並ぶ路地との境に

ひっそりとかかっていた。幅は一車線ほど。鉄骨の無機質な直線が切れかけた街灯に細く明滅し、頼りなげな境界を更に曖昧にしていた。

勢太はため息をついた。
また、ふられたのだ。

「だっていつも、何も聞いてくれないじゃない。

どうせ私には興味なんてないんでしょ？」

冷めた口調を残して、女が雑踏に消えたのは2時間前のことだった。

父が川へ消えたあの夜から、

勢太は人に質問することを恐れるようになった。

それが、人と親しくなる際の大きな壁となっていた。

いつものように橋の下を見つめると、何気なく半月が浮いている。

「蜃気楼の月、ね」

地球の裏側から凄まじい屈折率で空気の層を経由し、

月の無い夜の川面に結ばれる虚像のことらしいと知ったのは、

父が消えてから10年も経った後だった。

「そんなの」

空を仰ぎ見ると、星一つ無い無限の黒だった。

「あるわけ」

勢太はよろけ気味に欄干に駆け寄って、川面の半月を睨みつけた。

ふいに、追うなど言った父の記憶が蘇り、言い知れぬ反抗心が湧き上がったのだ。

ろくでもないトラウマ残して消えたくせに！何がっ！

ほとんど衝動的に、頭から飛び込んでいた。

勢太は、いましがた飛び込んできた水面に木製の橋がかかっているのを見た。

その橋は鬱蒼と茂る森と花畑の広がる原っぱの境にかかっていた。

幅は城門の入り口ほど。

日の光で輝く桜色の薄もやに、

木造りの橋梁の緩やかな曲線が力強くかかっていた。

逆さまにかかった橋の上へ満点の着地を決めて、改めて足が震えた。

なんだここは

霞がかかった橋の上に視線を走らせた勢太は更にぎよつとした。

なんだこいつは

勢太より丈のある魚が、

胸ビレの位置に生えた羽の片方を欄干について器用に体を支え、立っていた。

勢太は、残った片羽がきまりわるそうにエラの横を掻く前に、腹ビレのあたりではためいたのに気づき、戦慄した。

「親父！？」

「羽の生えた魚が空を飛ばなかった理由がわかったぞ」

半開きの口がパクパクと動いた。

「水が好きだというあたり前のことに気づいたからだ

姿形が変わっても、その本質は変わらなかった

本質こそが大切なことを、あの本は表していたんだ」

「あんたまさかそんなことのために？」

「大事なことだ

・・・間に合って良かったよ。お前の願いを叶えられた」

父の羽が、勢太を橋から突き落とした。

「もう橋の下ばかり見るのはやめなさい」

勢太は、飛び込んだ時の巻き戻しのように夜の街灯の下へ戻った。

直後、ばしゃあと音がして、

巨大な白い魚影が橋の横をかすめ、夜空へ飛び去った。

半月が現れていた。

勢太は、もう橋の下を見なかった。

そこには何も映っていないと思ったからだ。

橋の上にかかった夜の虹を見上げながら、勢太は携帯電話を取り出した。

2時間前に勢太をふった女にかけた。

「はい。何？」

「あのおさ。名前、聞いても良いかな？」

日付も変わろうかという深夜、それも平日ということもあってか普段は賑いを見せている日本橋も静まり返っている

この橋の欄干には、青銅でできた異形の者達が留まっている。

四隅にはぎよろりと目をむいた獅子の像が、そして橋の中央には背中合わせで2体ずつ、両側で4体の西洋の神話に出てくるドラゴンのような姿の像が鎮座していた。

その顔は長い髭を持った中国の龍のようで、鋭い眼が橋の両側を睨みつけている。背筋を伸ばした身体は鱗のようなもので覆われ、背中にはまるで蝙蝠のような羽がついている。折りたたまれた筋肉質の後足はその荒唐無稽な造形に比べぞくりとするほど写実的で、今にも欄干を蹴って飛び立ちそうに見えた。

「あれは麒麟って神獣なんだよ」

祖母の声が耳に蘇る。

だが闇の中に照らし出されるその姿は、神というよりもなにか禍々しいもの思えた。

亜美はじつと暗い川面を眺める。

中学校でいじめにあう日々。

全てから逃げ出したくてさまよった挙句、気がつけばここに来ていた。

「死ねるかな」

手すりから身を乗り出す。と、横に警察署が見えた。

——ああ、だめか。

ため息をついたとたん、水面が血のような色に染まった。

振り返ると、街灯がまるで何かを警告するように真紅に輝いている。

それと同時に、街並みが黒い霧の中に沈み始めた。

何が起きているのか理解できず、欄干を掴んだまま亜美は立ちすくむ。

32 「麒麟」

師走寝太郎

「亜美はいつもこれを見て泣いていたもんだ」

今はもう亡くなった祖母が口癖のように言っていた。

そぼ降る雨の中、亜美は橋に設置された街灯から漏れるオレンジの光の中にいた。

いきなりツン裂くような咆哮が耳元で聞こえ、顔を向けると目の前には血の滴る牙が並んだ大きな口が開いていた。

——咬まれるっ。

しゃがみこむ亜美。

しかし、その牙を持つ獣は風のように飛来した大きな塊の一撃で、橋の下にざぶんと落ちた。

「娘、なんでこんなところに来た」

ヒラリと亜美の目の前に着地したのは、あの麒麟だった。

黒光りした鱗に覆われ、背中には黄金の羽根が光っている。

亜美が見回すと橋の両端から、不気味な魔たちが唸りをあげて押し寄せていた。

欄干の獅子が吠えるとその大群はひるんで橋から遠ざかるが、すぐにまた波のように押し寄せる。

橋の欄干を越えて飛来する魔は麒麟が撃退していた。

「この橋は、魔界とこの世の境界だ。普通の人間はここには来れぬ……」

ちらりと亜美をみると麒麟は鼻を鳴らした。

「お前、命の灯が消えかけていたな、大方死のうと思っていたんだろう」

亜美を指してやってくる魔から庇うかのように、黒い麒麟は閃光のような速さでそれらを打ち倒し続けた。

そのうち魔の大群は姿を消し、神獣達はそれぞれの配置に戻って行った。

しかし黒い麒麟だけはまだ亜美の傍らにいた。

がさがさ。

ふと、亜美が音の方向を見ると蝙蝠のような小さな魔がよろよろと歩いてくる。

その魔はいきなり亜美に飛び掛かって来た。

だが麒麟は微動だにしない。

首に鋭い爪が立てられ、亜美は痛さのあまり叫びをあげる。

その瞬間、魔が亜美の口の中から飛び込んだ。

ごくり。

——魔を飲んだ。

どうしよう、と麒麟を見上げる。

「お前は私を見て泣いてばかりいた。お前の心はか弱く純白すぎて、生きていけるか心配だったよ」

静かな声が頭上から降ってきた。

「皆、心の魔と戦いながら生きる力を得ているのだ。その魔は私からはなむけだ。弱い魔だからお前なら押さえ込める」

亜美の脳裏に、いじめの首謀者をひっぱたく自分がよぎる。

——だめ、暴力は。でもあんな子なんか心折られるもんか。

今までに感じたことの無い怒りがこみ上げる。

気が付くと死にたいという気持ちだが、消え去っていた。

いつの間にか、周囲は現世の日本橋。

「もう少し生きてみる」

亜美は元の像に戻った麒麟に笑いかける。

神獣の目が心なしに微笑んだ気がした。

33 「悠久の橋」

栃木けなしつつ、栃木の中心で栃木愛を叫んだケモノ。

俺は座り続けている。

そこは橋だ。

橋しかなかった。

板と鎖と縄でできたつり橋で、だけど支える柱が見えなかった。どこまでも橋が続いている。地平線の彼方まで、と言うと表現がおかしい。ここには地面がない。

橋の下は分厚い雲が広がって、下界の姿は見えない。そもそも、それがあらかは知らない。

「今日は青天、と」

雲一つない青空を見て、一人つぶやく。手にした手帳に今言ったことを書き記して、胸ポケットにしまう。一応ここにも天気や時間があり、今は逆に雪の降る夜もある。

いつからいたのかは知らない。気づけば、この上にいた。素人ながらに冬山に挑戦したのが仇になったのか、それも知らない。

最初は混乱したが、この居心地は悪くない。尿意も便意もない。空腹も渴きもあまり感じないが、時折、サククから食料を取り出しては口に入れている。眠れば心地よく、なぜか心が軽い。

俺は死んでしまったのか。あるいは昏睡状態で、どちらかの端に辿りつければ死ぬか、目を覚ますのか。

橋から落ちてみることも考えたが、やめた。今日もぼんやり空を見る。

半年が過ぎた。俺は歩き始めることにした。

行き着く先が地獄であれ、現実であれ、このまま無為に時間を使うのも耐えられなくなっていた。むしろ、長い間座っていることによく耐えられたと思う。

歩いてみると体はあまり鈍った感じはせず、思ったように動く。長く歩いているのに疲れも感じない。今さらながら、髭が伸びていないことに気づいた。

なんてシンプルで怪奇な空間なのだろう。改めて、不思議に思う。

ある日、目を覚ますと雲の中にいた。別段、珍しい訳でもない。

月に何度かはこういう日もある。俺は気にせず、体を起こし歩き出す。

しばらくして、見渡しの悪い雲の中でぼんやりと二本の柱が見えた。

不意に現れた柱、突然のことで立ち止まり、それが何を意味するかに気づいて、俺は走る。

衝撃で揺れるつり橋、視界が上下に蠢く、しかし柱に迫るほどに揺れは少なくなった。

「つ、ついた」

柱を抜けると陸地があった。とうとう、俺は橋を抜けたのだ。万感の思いで土に触れる。掴んで、両手で擦り合わせて、柔らかい土と硬い石の感触を確かめる。

そこには雑草もあった。すぐさま撫でて、引き抜いて、舐めて、咀嚼する。

「うっ」

苦い草の味が口に広がる。それが嬉しかった。何かが始まる、そう期待した。

その時、突風が吹く。風は雲を散らす。

目の前に、橋が現れた。今までのと違う、車を通すために作られた島と島を繋ぐような大きな橋だ。

絶望はなぜか少ない。この空間のせいかな、それは知らない。

確かに、始まった。新しい橋が始まった。

あの日から、幾日か経った。

俺は橋の上にいる。コンクリートと鉄筋とワイヤーで出来た大きな橋だ。

一日、陸地の上にテントを張り、また歩き出した。冷静に考えれば状況はあまり変わっていない。結局、俺にできることは変わらないが、悪いことばかりじゃない。

靴底から感じるアスファルトが懐かしく、今までなかった直角の形が新鮮で、点検用の扉から登った支柱からの眺めは素晴らしかった。夜にはライトアップもされ、電球の煌びやかな輝きに心を躍らせる。

毎日が新鮮で、その様子を手帳にしたため続けた。

その後も橋の終わりには陸地があり、また橋があった。

日本古都にある弧を描く橋、一枚岩の橋、木の根や蔦の橋、中世欧州の石橋、渡り廊下……様々な橋が続く。

いつしか陸地で一泊するのが習慣となり、新たな橋に思いを馳せるようになった。橋の造形と機能に好奇心を突かれ、本来の目的を忘れることもある。

しかし、橋は変わっても変わらない物もある。

空だ。空だけはいつもと変わりなく、安心をもたらす。

俺は今日も歩く。空を見上げながら。

——夏山で一つの手帳が発見された。行方不明者の物と思われるその手帳は、今も文字を刻み続けている——

——以上、33作品。